

# VIEW21

〈ビュー21〉  
高校版  
Volume 3

2015  
August

8月

## 今こそ、 教師が語り合う時

特集

### 高大接続改革と これからの 教師の役割

新課程 指導最前線

新課程入試に向けた  
2年生後半の指導のあり方

指導変革の軌跡

北海道  
札幌北高校  
岡山県・私立  
岡山中学・高校

半歩未来を考える教育オピニオン

「アグリマイスター顕彰制度」で  
変わる農業高校教育

町の風景をじっと見つめる  
いつしか、つくりたい未来が見えてくる



1 神戸大で建築学を学ぶ学生の協力を得て、復興への足跡を写真で残す定点観測に取り組む。震災前の様子が映像で記録されている場所や、地域の人たちに愛された憩いの場所など、180カ所を定期的に歩き、復興の途にある風景を写真に収める。変わりゆく町を見ながら、生徒たちは「つくりたい郷土の未来」を思い描く。



2 3 2013年4月にスタートした定点観測。今後、5年、10年……と長い時間を掛けて町の変化を記録する。未来の大槌高校の生徒たちに引き継がれていく活動だ。



ハートを  
こがせ!

Vol.03

岩手県立大槌高校  
復興研究会

被災地の「今」を支え、伝え、  
そして未来を考える！  
高校生が挑む震災からの復興

高校生だから出来る「復興」が  
こんなにたくさんあった!

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北沿岸部では、震災からの復興に貢献できる人材を育成すると共に、震災の記憶を風化させないために、各校で様々な活動を行っている。中でも、岩手県立大槌高校の復興研究会は、全国の様々な団体、教育機関と連携・交

流しながら、復興の途上にある地元・大槌町の現状を広く発信し、次代を担う若者として新しい町づくりに積極的にかかわっている。被災地で暮らし、学ぶ中で、教師の想像を超えるスピードで大きく成長していく生徒たちの熱いハートに迫る。

机上の空論は1つもない！  
私たちの意見が  
実際に町をつくる



7 小泉進次郎復興大臣政務官を迎え、大槌高校の生徒たちが策定した「コミュニティ戦略」について意見交換を行った。東京大の研究者らと共に考えた施策の実現のため、大槌町は50万円の予算を計上した。



4 5 6 公園づくりに高校生の意見を取り入れたいという大槌町都市整備課の申し入れを受けて、公園づくりワークショップにも参加。震災後、公園や運動場がなくなり、遊び場を失った子どもたちのために、安心して集まり、遊べる場所を考えるなど、コミュニティの再生にも深くかかわっている。



今こそ、  
教師が語り合う時

◎高大接続改革に象徴されるように、今、高校教育を取り巻く環境が大きく変化しようとしています。それにどう対応していくのかを先生方同士で考えることも重要ですが、同時に、今回の変化を、目の前の生徒が抱える課題や先生方の日々の悩み・不安を打ち明け合う機会にすることも出来るのではないのでしょうか。教師が今と未来を語り合うその先に、これからの教育のあり方・教師の役割が見えてくるのかもしれない。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木崇

## 2 チカラ アワセテ

経験や立場が違うからこそ協働は豊かなものになる  
三重県立木本高校 英語科◎山口菊夫、川上真由子

## 4 特集

高大接続改革と  
これからの教師の役割

6 現状把握 高大接続改革の背景にある環境変化を捉える

8 文部科学大臣「真の学ぶ力」を育むための学校教育、入試の改革を目指して  
メッセージ 文部科学大臣、教育再生担当大臣 下村博文

12 大学人 インタビュー 大学の個別選抜改革は高校現場にどのような影響を与えるか  
大阪大 未来戦略機構戦略企画室教授 川嶋太津夫

14 実践事例① 通常教科、合教科・科目、総合学習の三位一体で、真の学力を育む  
群馬県・伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

18 実践事例② アクティブ・ラーニングと課題解決型学習で、真のリベラルアーツを追究  
東京都・私立かえつ有明中学・高校

22 座談会 変革の時代、生徒と共に成長し続ける教師であるために  
宮城県利府高校 長谷川弘和 / 東京都・私立かえつ有明中学・高校 佐野和之  
宮崎県立都城泉ヶ丘高校 黒木篤

## 26 ハートをこがせ!

岩手県立大槌高校 復興研究会 高校生の視点で復興を支えながら大きく成長する

## 28 新課程 指導最前線

先行実施生への指導の振り返りから考える 新課程入試に向けた2年生後半の指導のあり方  
福島県立橋高校 / 兵庫県立加古川東高校

## 32 指導変革の軌跡

北海道札幌北高校

進学実績向上◎新課程入試の理科に対応 キャリア教育も見直し志望進路を実現

岡山県・私立岡山中学・高校

指導力向上◎教師の意識改革を進め 学校全体で生徒一人ひとりを見守る

## 40 改良! 指導ツール ビフォーアフター

1年生 夏休みの振り返り指導ツール

## 44 半歩未来を考える教育オピニオン

「アグリマイスター顕彰制度」で変わる農業高校教育

東京都立園芸高校統括校長 徳田安伸 / 埼玉県立熊谷農業高校校長 竹本政弘 / 東京都立瑞穂農芸高校校長 小堀紀明

## 48 特別企画

「トビタテ! 留学JAPAN 日本代表プログラム高校生コース」壮行会開催レポート

## 50 未来をつくる大学の研究室

鉱物から金属を分離する技術を追究し ものづくりを根底から支える

秋田大 国際資源学部 柴山教研究室

## 54 VIEW'S REPORT

京都大、大阪大、関西学院大による「高大接続フォーラム」開催!

高校教育改革、大学教育改革、入試改革——高大接続の現状と今後の動向とは

## 64 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます



三重県立木本<sup>きのもと</sup>高校 英語科  
山口菊夫 + 川上真由子

## 経験や立場が違うからこそ 協働は豊かなものになる

ICTの活用で  
長年の理想の授業に迫る

**山口** 50歳を過ぎて「理想の授業の実現にはICTが必要だ」と感じました。授業スタイルを変えることに不安がなかったわけではありませんし、独力では限界があるので、昨年度、同じ学年と一緒に担当している川上先生に「一緒にやらないか」と持ち掛けたのです。突然の話に驚いたでしょ？

**川上** 山口先生の授業は私にとっては大きな目標の1つでしたから、その先生が更に大きな挑戦をすることが驚きであり、刺激を受けました。私は大学時代にICTの教育的利用について触れる機会があり、興味を持っていましたが、機械は苦手ですし、1人で始める勇気ありませんでした。そのため、ありがたいお誘いでした。

**山口** ICTというツールを使って何をを目指すのか、ほぼ毎日、1年程掛けて2人で検討しました。理想の授業や育てたい生徒の姿を随分語り合いましたよ。

**川上** はい、自分の授業観や指導観のベースが出来ていくのを感じました。

**山口** これまで私が目指してきたの

は、生徒全員が英語を使うことを楽しみながら、大量のインプット・アウトプットを経験する授業です。板書やプリントが中心の授業は、インプットの量に限界がありますし、生徒の顔が下を向きがちになるなどの課題がありました。そこで、ICTの活用で、テキストを良く展開し、生徒の状況が把握しやすい授業を目指したのです。

**川上** 私はICTの利点は、「生徒の興味を引くこと」と限定的に捉えていました。山口先生と指導を構築する中で考えが深まりました。以前は重要なセンテンスのみを板書していましたが、読解させる英文全文をスクリーンに映し出して指導すると、生徒が前後の文章との関係を意識することが期待できます。また、板書の時間を減らせるので、その分、言語活動の時間を増やして、挙手や発言など、生徒が授業に参加する機会を更に確保していきたいです。

**山口** 教材づくりには手間が掛かり、授業の展開はスピーディーなので、これまで以上に気が抜けません。それでも、突き刺さるような生徒の真剣なまなざしと集中力には、毎回感動を覚えます。

協働によって視野が広がり  
スムーズな授業改善が実現

もともと私はプログラミングが趣味で、技術面だけでいえば、独力でも授業へのICTの導入は可能だったかもしれません。しかし、1年間の取り組みを振り返ると、若手である川上先生ならではの生徒の目線に立った発想で随分と視野を広げられましたし、協働によって責任感を分かち合ったことで、スピーディーに授業改善を進められました。私と川上先生とはかなり年齢差があり、生徒への接し方や指導法は異なりますが、実践を通して授業づくりの理念を共有できました。今後は、川上先生にも教材開発に取り組んでもらい、ICTを利用した授業づくりに更にまい進してほしいと思います。



三重県立木本高校  
山口菊夫 54歳

やまぐち・きくお 教職歴27年。同校に赴任して8年目。教務主任。英語科。三重県立伊賀高校（現・あけぼの学園高校）、和歌山県立新宮高校などを経て、木本高校へ。

## 三重県立木本高校

◎前身は、1920（大正9）年南牟婁郡立高等女学校。熊野市東部に位置し、近辺には「七里御浜」「鬼ヶ城」など世界遺産登録の名所が多数点在する。長らく普通科・商業科・家政科があったが、1995年に普通科・総合学科に再編して新たなスタートを切った。2012（平成24）年に普通科に文理コースを新設し、国公立大や難関私立大の志望者への指導を強化している。

◎設立 1948（昭和23）年 ◎形態 全日制／普通科・総合学科／共学 ◎生徒数 1学年約190人

◎2015年度入試合格実績（現浪計）

国公立大は、お茶の水女子大、名古屋大、三重大、首都大学東京、大阪府立大などに18人が合格。私立大は、青山学院大、明治大、早稲田大、龍谷大、立命館大、関西学院大などに延べ116人が合格。

◎URL <http://www.mie-c.ed.jp/hkimot/>



**若手とベテランの視点の違いが  
深みのある実践を生み出す**

**川上** ICTによって、授業でやりた  
いこと、出来ることの可能性が広が  
りました。でも、教材づくりを山口先生  
に頼ったり、機器の操作に戸惑うこと  
があったりと、課題も残っています。

**山口** 課題があるのは私も同じです。  
私は、授業内容が高度になるあまり、  
生徒を置き去りにしそうになって、「し  
まった！」と反省することがあります。  
分からない生徒をとことん支えようと  
する川上先生の指導を見て、教師とし

ての原点を思い出させてもらっている  
んですよ。2人の視点の違いによって  
実践に深みをもたらされていると思  
います。

**川上** 今は山口先生の真似をすること  
で精いっぱいですが、行く行くは自分  
の強みを生かせるような形でICTの  
活用法を模索したいと思います。

**山口** 50歳を超えてからの挑戦を通し  
て、教師はいくつになっても理想を追  
究し続けられることを実感しました。  
現時点で授業の完成度はまだ8割目。  
これからも知恵を出し合い、私たちの  
頂上を目指しましょう。

**英語に前向きな気持ちで臨み  
卒業後も学び続ける生徒を**

本校がある地域は外国人と接する  
機会が少なく、英語との接点は授業  
だけという生徒がほとんどです。つ  
まり、英語へのイメージは授業で決  
まります。そのため、授業に楽しい  
イメージを持ってもらうこと、そし  
て、知識だけではなく「学び方」を  
習得させることを大切にしていま  
す。その手法として、私はICTの  
有効性を実感しています。山口先生  
には、初任の頃から指導していただ  
いていますが、教師歴4年目を迎え、  
そろそろ自分なりの指導法を考える  
時期に来ていると感じます。英語が  
苦手な生徒に英語の楽しさを伝える  
指導や、機械が苦手な教員でも導入  
しやすいICTの教材づくりなどに  
取り組んでいきたいです。



三重県立木本高校  
**川上真由子 29歳**  
かわかみ・まゆこ 教職歴3年。同校に赴  
任して4年目。2学年担任。英語科。

# 高大接続改革と これからの 教師の役割

教育再生実行会議の第四次提言、2014年12月の中央教育審議会答申、そして、15年1月の「高大接続改革実行プラン」の策定と、高大接続改革が着実に進行している。今号は、改革の背景やその目的・狙いを改めて押さえつつ、現場の教師や学校が今回の改革をどのように受け止め、どう変わろうとしているのかを、実践事例や教師の声を通して見ていく。

「2種類のテストの導入」や「複数回受験」には反対が多いが、入試改革の方向性には賛成が多い。

**Q.** あなたは、現在の改革で検討されている次のような取り組みについて、賛成ですか反対ですか。

■ 全国の高校の校長 1,228 名	賛成		反対 (%)
現在のセンター試験の廃止	19.6	<	41.6
基礎レベル・発展レベルの2種類の「達成度テスト」(※) 導入	27.2		41.4
「達成度テスト」の複数回受験	31.8		40.6
「達成度テスト (基礎レベル)」の推薦・AO入試への活用	46.9	>	26.1
「達成度テスト (発展レベル)」の結果の段階別表示 (1点刻みにならないような結果表示)	32.2		31.3
共通入試を基礎とした上で各大学が多面的な評価を加えて実施する入学者選抜	63.0	>	12.1
英語における資格試験 (TOEFL など) の活用	50.7	>	19.7

出典/ベネッセ教育総合研究所「高大接続に関する調査」(2014)

※基礎レベル・発展レベルの2種類の「達成度テスト」は、それぞれ高大接続改革実行プランで示された「高等学校基礎学力テスト (仮称)」、「大学入学希望者学力評価テスト (仮称)」を指す。

本号のテーマ  
高大接続改革

改革の背景

現状把握【P.6～7】

生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、  
グローバル化などの環境変化

これからの  
時代に  
必要な力

- ① 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）
- ② 知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果などを表現するために必要な思考力・判断力・表現力などの能力
- ③ ②の基礎となる知識・技能

これらの力を、高校教育、大学教育、大学入学者選抜の改革による  
新しい仕組みによって育む

改革の要旨



文部科学大臣、  
教育再生担当大臣  
下村博文

文部科学大臣メッセージ  
【P.8～11】

高校教育

- ◎ 高大接続改革と歩調を合わせた学習指導要領の抜本的な見直し
- ◎ 課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実
- ◎ 教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるための、新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入

大学教育

- ◎ 個々の授業科目などを超えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントの確立
- ◎ 主体性を持って多様な人々と協力して学ぶことの出来るアクティブ・ラーニングへの質的転換

大学入学者選抜

- ◎ 現行の大学入試センター試験を廃止し、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する新テスト「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入
- ◎ 各大学が個別に行う入学者選抜を、学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法を採用のものとし、多様な背景を持った学生の受け入れを促進
- ◎ 大学にとって改革のインセンティブとなるような財政措置などの支援の実施



大阪大  
未来戦略機構  
戦略企画室教授  
川嶋太津夫

大学人インタビュー  
【P.12～13】

これからの時代に必要な力を育むために求められる  
指導変革とは？ 教師の役割とは？

指導変革

群馬県・伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

実践事例①【P.14～17】

通常教科、合教科・科目、総合学習の三位一体で、真の学力を育む

東京都・私立かえつ有明中学・高校

実践事例②【P.18～21】

アクティブ・ラーニングと課題解決型学習で、真のリベラルアーツを追究

教師の  
役割

変革の時代、生徒と共に成長し続ける教師であるために

座談会【P.22～25】



宮城県利府高校  
長谷川弘和



東京都・私立  
かえつ有明  
中学・高校  
佐野和之



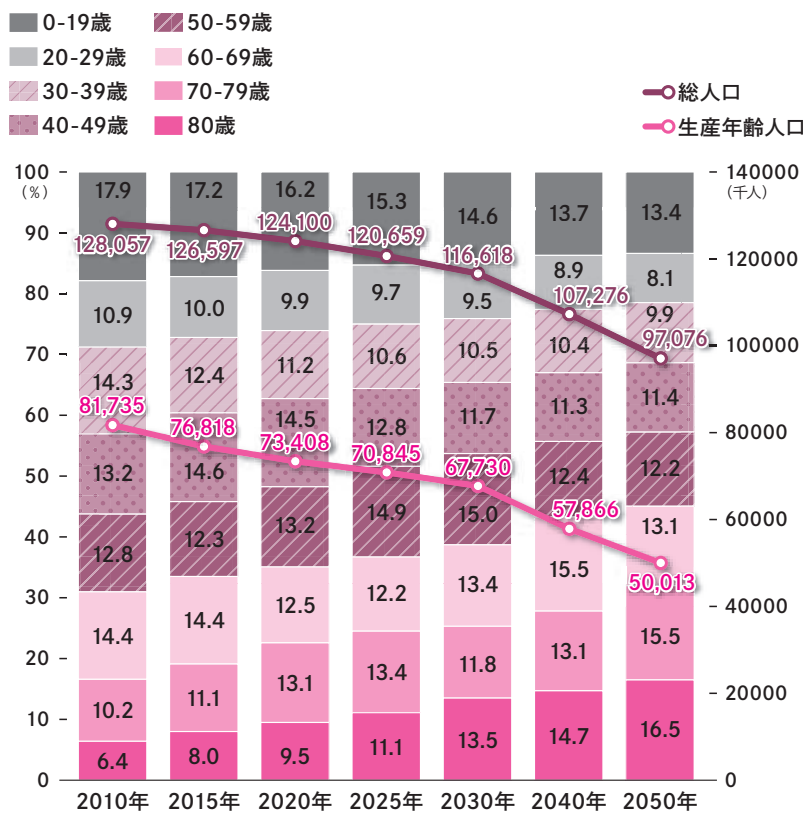
宮崎県立都城泉ヶ丘高校  
黒木 篤

# 現状把握

ますます激しく変化する社会、  
そこで求められる力とは

2014年12月に中央教育審議会より提出された答申の冒頭では、「生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても、世の中の流れは人が予想するよりもはるかに早く、(中略)そうした変化の中で、これまでと同じ教育を続けているだけでは、これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない」と問題提起されている。実際、10年時点で8174万人であった生産年齢人口は、50年には5000万人まで減少し(図1)、労働生産性も、90

図1 日本の将来推計人口 / 年代別構成比 (出生中位<死亡中位)推計)



出典/国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(2012年1月推計)」

図2 各国の労働生産性伸び率(実質、年代別)

	日本	米国	英国	フランス	ドイツ	カナダ	スウェーデン	韓国
1970年代	3.71	1.04	1.83	3.09	2.60	1.30	1.01	5.24
1980年代	3.69	1.66	2.02	1.98	1.31	0.94	1.47	6.74
1990年代以降 (~2007年)	1.14	1.84	2.53	1.15	1.43	1.32	2.58	4.18

出典/内閣府「産業別生産性の動向等について」(2014年3月)

# 高大接続改革の背景にある 環境変化を捉える

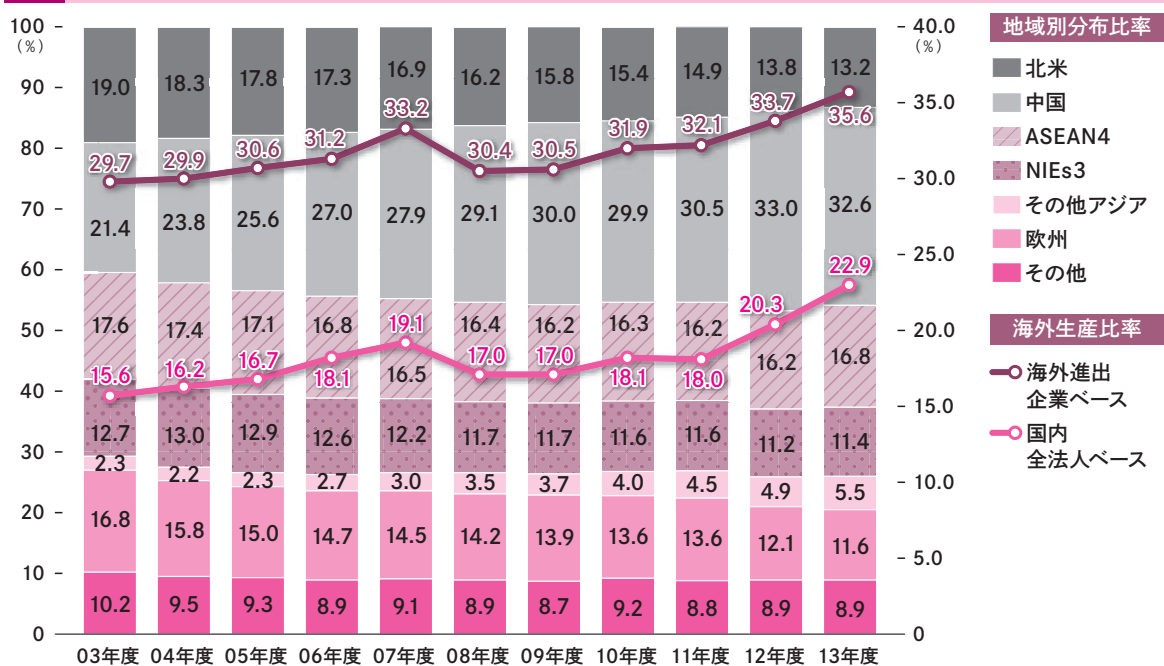
2014年12月の中央教育審議会答申、そしてそれを受けて15年1月に策定された「高大接続改革実行プラン」——教育改革における最大の課題でありながら、その実現が困難であった高大接続改革が今、初めて現実のものになるうとしている。その背景には、改革の必要性を高める様々な環境変化があった。

年代以降大幅に上昇率を低下させている(図2)。そのため、企業は海外市場に活路を見いだそうとし、グローバル人材への需要も高まっている(図3、4)。

このような環境変化は、社会に様々な課題をもたらす。しかも、グローバル化・デジタル化によって膨大な情報があふれる今、何が課題なのかも見いださず、また、複雑な要因によって引き起こされている課題が多いため、それぞれの解決策も1つではない。したがって、これらの社会を生きる上では、自ら課題を見つけ、それを解決する力が求められる。しかしながら、そのような力・姿勢は、日本の若者には不足している(図5)。

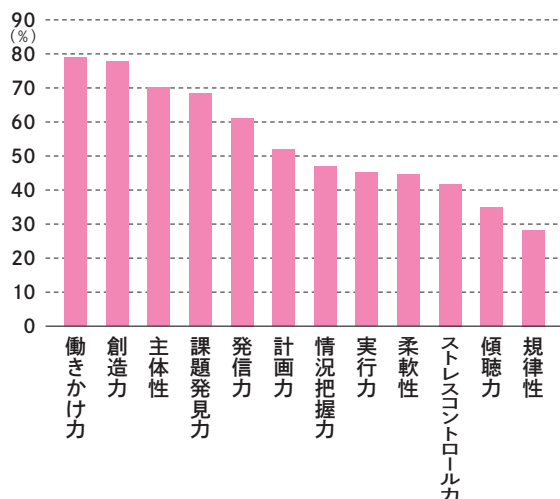
今回の改革で求められている、課題発見・解決の際に必要な「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」などの育成は、これからの社会を生き抜くことだけでなく、今の教育課題を解決することにもつながると言えよう。

図3 企業の地域別分布比率と、海外生産比率の推移



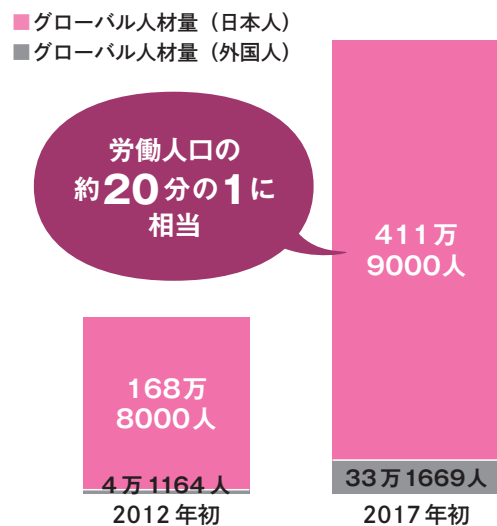
出典/経済産業省「海外事業活動基本調査 概要」(2013年7月調査/2014年7月調査)

図5 企業が若手社員について不足していると考える社会人基礎力



出典/厚生労働省「平成25年版 労働経済の分析 一構造変化の中での雇用・人材と働き方」

図4 グローバル人材需要の将来推計値



出典/経済産業省「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」(2012年調査)



しもむら・はくぶん◎早稲田大教育学部卒業。衆議院議員、東京都第11区板橋区(現在7期目)。2012年、教育再生実行本部長就任。同年12月から、文部科学大臣、教育再生担当大臣。著書に『世界を照らす日本のこころ』(IBCパブリッシング)。

# 「真の学ぶ力」を育むための 学校教育、入試の改革を目指して

文部科学大臣、教育再生担当大臣 下村博文

高大接続システム改革は、高等学校教育改革、大学教育改革、及び大学入学者選抜改革を、システムとして一体的に行う改革である。多様な背景を持つ子どもたちが、それぞれの目標の実現に向けて努力を積み重ね、社会で活躍できる力を付ける教育や評価のあり方とはどのようなものなのか。下村博文文部科学大臣に聞いた。

## 社会が劇的に変わる中 教育も変革を迫られている

「高大接続改革実行プラン」(以下、実行プラン)で示した高校教育・大学教育・大学入試の三位一体の改革は、明治以来続いてきた学校教育に抜本的な転換を迫るものです。

現在の学校教育は、1872年に公布された学制に始まりました。これは、近代工業化社会を支える人材の育成を目指したシステムであり、日本を経済大国に押し上げた優れた教育制度として、誇るべきものでしょう。ところが、1990年代に入り、

時代は情報化社会へとシフトしてきました。科学技術の進展は極めて速く、「ドッグイヤー」「マウスイヤー」ともいわれています。

ニュース等で聞いたことがあるかもしれませんが、キャッシュ・デビッドソン氏(現ニューヨーク市立大学大学院センター教授)は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在しない職業に就くだろう」という研究結果を発表しました。更に、「今後10〜20年程度で、アメリカの総雇用の約47%の仕事が自動化される可能性が高い」という、マイケル・A・

オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）の研究結果もあります。

現在ある職業が将来もずっとあるとは限らない、そのように社会が劇的に変化していく中で、教育だけが旧態依然としたままでよいはずがありません。子どもたちが未来に花を開かせるために必要な力は何か、その力を育むためにどのような教育をすべきなのか、そうした根本的な意識改革・制度改革が問われています。

それは、私が文部科学大臣だからとか、安倍政権だからということではなく、たとえ政権が代わろうとも、日本の未来を考えれば必然的に改革を行うべき事態に直面しているということなのです。そのような危機意識を、教育に携わる人たちには持つていただきたいと思っています。

## 法令改正もして 大学に入試改革を迫る

先を見通すことが難しい時代において必要とされるのは、社会で自立して活動していくための「真の学ぶ力」であり、それは次の「学力の3

要素」であると考えます。

① 知識・技能の習得（狭義の学力）

② 知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、

成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力

③ 主体性を持ち、多様な人々と協働しつつ学習する態度

実行プランは、この「真の学ぶ力」を育むための高校教育、大学教育を目指し、そうした教育へと変革を迫るキーポイントとして大学入学者選抜改革を推進していきます。

大学入学者選抜改革の最大のポイントは、各大学のアドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）に基づき、多面的な選抜の実施です。現在の大学入試は、知識の暗記・再生を一発勝負で1点刻みに評価するもので、選抜の客観性を過度に優先しています。その発想から脱し、共通テストの「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では思考力・判断力・表現力を中心に測り、大学の個別選抜では小論文や面接、討論、高校時代の活動歴などを判断材料にし、

自学のアドミッション・ポリシーに基づき、総合的に評価する方法にするのです。

ですから、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は、現行のセンター試験を少し変えるというものではなく、新しいテストになると言えます。また、各大学が新しい入試形態を取り入れ、入学後の学び、卒業の基準と、アドミッション・ポリシーと共に、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施の方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）の一体的な策定を義務付けるための法令改正を、2015年度中をめどに行う予定です。

## 1点刻みで決まる入試は 本当に適切なのか

実行プランで示した新たな入試方法は、子ども一人ひとりが積み上げてきた力を多様な方法で「公正」に評価するものであっても、「公平」さが失われるのではないかという懸念の声があるようです。入試において「公正・公平」であ

ることはもちろん重要であり、そのために小論文や面接などの方法や評価の仕方を工夫する必要があります。しかし、「公平」が保証できないからといって、従来通り学力試験一本とすることが、「真の学ぶ力」を育むために適切といえるのでしょうか。

アメリカやヨーロッパの大学では、入試において、学力だけでなく、小論文、面接、課外活動などを総合的に見て可否を判定することがスタンダードとなっています。また、日本でも、企業の採用試験は、学力だけで判断されるものではありません。日本の大学入試も、人物を多面的・総合的に評価する選抜にすることが求められているのです。

## アクティブ・ラーニングを軸に 授業の質の転換を

高校教育にも、「真の学ぶ力」を育むために、大きな変革を期待しています。その中心となるのが、アクティブ・ラーニングです。

アクティブ・ラーニングは、この言葉が浸透していくにつれ、誤解も

生まれているようです。その一例が、「講義形式の授業の方が早く知識が身に付くのではないか」という意見です。しかし、学習定着率は、講義を受けることよりも、グループ討議や他人に教えた経験を積んだ方が高いと言われています。

以前、アメリカで見学した高校の授業では、広島への原爆投下をテーマに討論していました。その内容は、生徒たちが、自分の意見や歴史の正当性という観点ではなく、当時の政治的な判断を再現しながら、アメリカの大統領、日本の天皇など4つのグループに分かれ、それぞれの立場で議論するというものでした。他人と議論するには十分な知識が必要となるため、相当の事前学習が必要になります。つまり、学習活動が魅力的であれば、子どもたちが自ら知識・技能を得ていくという主体性にもつながり、物事を見る観点が広がる学習方法だとも感じました。

もう一つ、気になる誤解は、アクティブ・ラーニングは子どもたちが集団で討論すればよいと捉えている方がいることです。アクティブ・ラーニングでは、活動の前後に、子ども

自身が学習の見通しを立てること、学習を振り返ることも大切です。目標を立て、それが達成できたのかを自分で確認することが、次の学習意欲に結び付き、主体的な学習姿勢を育んでいくからです。

日本では、アクティブ・ラーニングを取り入れたばかりで、授業モデルが少ないため、そのような誤解があるのだと思います。子どもの状況や授業の目的によって、アクティブ・ラーニングの方法は様々です。授業時間が増えるわけではありませんから、方法には工夫が必要であり、授業の質的な転換が問われることになっていしょう。そのためにも、文部科学省では教員研修制度の拡充を図り、先生方が新たな授業形態を模索し、実現できるよう支援していきます。

### 身に付けるべき基礎学力を 確実に育成する枠組みに

高校生が自ら学習に向かうための枠組みづくりにも注力しています。

日本の高校生や大学生の家庭学習時間は、アメリカの高校生や大学生と比較して、明らかに短いという調査結果があります。更に高校3年生

では、平日、学校の授業時間以外に「全く」「ほとんど」勉強していない生徒が約半数いるという調査結果もあります。これは大変重要な課題です。

また、約4割の大学が、高校段階までの学習内容の補習を行っています。推薦入試やAO入試の中には本来の趣旨・目的に沿っておらず、事実上、学力不問であるために、大学での学修に必要な学力が身に付いていないまま入学してしまう学生もいるからだと認識しています。

これらの状況は、日本の子どもが勉強が嫌いだとか、勉強が出来ないという以前に、高校で勉強をしなくてもすまされているという制度上の問題があると捉えています。

PISAの直近の結果(2012年)では、国単位で比較した時に、日本は、読解力と科学的リテラシーでは1位、数学的リテラシーでは2位と、高い力を示しました。小・中学校段階までに育んできた力を更に伸ばすためにも、高校生が自ら学習するスキームを整えなければならぬ。そこで新たに実施するのが「高等学校基礎学力テスト(仮称)」です。高校生が身に付けるべき基礎学力が

何かを示し、それを確実に学習していけるよう、生徒自らがその達成度を把握し、学習意欲の喚起や学習の改善に結び付けられるような位置付けにしたいと考えています。

### 英語の4技能を バランスよく育む指導を

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の実施に当たり、最も期待するのは英語の学習への影響です。文部科学省の調査では、高校3年時の英語力が中学校卒業段階で目標とするレベルという生徒が圧倒的に多いという結果が生まれました。そのような状況では、高校3年間の英語の授業で、生徒は何を学習してきたのかと問わざるを得ません。教育振興基本計画では、中学校卒業段階、高校卒業段階の英語力の目標を示していますが、「高等学校基礎学力テスト(仮称)」も1つの目標として、活用してほしいと思います。

英語に関していえば、大学入試での英語の試験も「聞く、話す、読む、書く」の4技能を重視した内容にシフトしていく必要があると考えます。例えば、センター試験で測る力は「読



「む」に偏重し、リスニングテストがわずかに課されるだけです。そのためか、子どもも教師も「話す」「書く」学習をあまり重視していません。しかし、グローバル社会において英語によるコミュニケーション能力は必須です。高校教育でも4技能をバランスよく身に付けられるような指導を行っていただければと思います。

### 子どもの心をオンにする 教育を出来るよう支援したい

子どもたちの「真の学ぶ力」を育むために実行プランでは様々な改革を行います。子どもたちに最も影響力のあるのは先生方自身です。私は若い頃、学習塾を開いていました。その後、議員となり、様々な職業の人と話すようになって感じたのは、教師は子どもたちの人生を変える影響力のある職業なのだということです。教えているのは、数学や国語だったとしても、それらを通して子どもの意欲を引き出す力がある。そうした職業は他にはありません。

「教育は、子どもの人生を  
変える影響力を持っている。  
教師は、そうした  
素晴らしい職業です」

気がかりな調査結果があります。日本青少年研究所が2012年に行った4か国の比較調査によると、「自分はダメな人間だと思うことがある」という質問に、「よくあてはまる」「まああてはまる」と答えた日本の高校生は約83%いました。アメリカは約50%、中国と韓国はそれぞれ40%程でした。先生方のクラスではどうでしょうか。もし、8割の生徒が「自分はダメだと思う」と答えたらどうでしょう。自分に自信のない生徒に意欲を持たせ、自分が存在することが社会の役に立ち、家族を幸せにしている存在なのだと思うような学習の積み重ねをする——学校がそのような場であってほしいと思います。

また、数週間でもよいので、海外に出るといっても1つの方法だと思います。日本で暮らす自分がいかに恵まれているか、当たり前と思っていたことが外国では特別だったことが分かるでしょう。価値観が変われば、世界は広がり、何事にも前向きになれます。文部科学省では「トビタテ！ 留学JAPAN」で、高校生の留学を支援しています。短期留学も推進していますから、生徒にぜひ勧めてください。ある高校では、全校に呼び掛けたところ、約60人が希望し、校内選考で10人に絞って応募し、5人が支援を受けることになりました。その過程で他の生徒にもチャレンジ意識が広まり、学校全体にプラスの効果があったと、その高校の先生は話していました。

「自分なりに頑張ってみよう」とやる気が出たら、子どもは放っておいても自分で学び始めます。その子どもは心をオンにする力が先生方にはあります。そして、その先生方自身がオンになるよう、文部科学省も支援していきたいと思っています。

## 大学人 インタビュ―

# 大学の個別選抜改革は 高校現場にどのような影響を与えるか

大阪大 未来戦略機構戦略企画室教授 川嶋太津夫

「高大接続改革実行プラン」では、各大学の個別選抜について、多面的・総合的に志願者を評価して選抜するものへと改善することを大学に求めている。

個別選抜改革に対する大学側の取り組みの現状はどうなっているのか、また、個別選抜改革は、高校の進路指導にどのような影響を及ぼすのかについて、川嶋太津夫教授に聞いた。

### 大学も評価方法を まだ確立できていない

今回の入試改革では、共通テストとして「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入されると共に、各大学の個別選抜を、アドミツション・ポリシー（入学者受け入れの方針）に基づきながら、各大学が自分たちの求める学生を、書類審査や面接などを通じてより丁寧に選抜するものへと改善することが求められています。志願者の学力を多様な観点から判断できるようになる点で、私は今回の入試改革を評価しています。

ただし問題は、タイムスケジュー

ルです。「高大接続改革に向けた工程表」では、個別選抜改革については、

「2016年度大学入学者選抜実施要項から順次反映」させていくことを求めています。しかし大学は、AO入試のような一部の志願者ではなく、一般入試を受験する数多くの志願者を対象に、その学力を多面的・総合的に評価するための方法をまだ確立できていません。したがって各大学は、徐々に体制を整えながら取り組んでいくことになると思います。また、大学間で評価方法についての情報を交換・共有するための仕組みを

整えていく必要もあるでしょう。

規模の大きい大学においては、全ての志願者に対して、小論文や面接、集団討論などの丁寧な試験を課すことは、困難だろうと考えています。今回の改革では、一般入試、推薦入試、AO入試の区分を廃止することが盛り込まれています。しかし、区分はなくなっても、一般入試の中で、面接や小論文などを重視した方式の入試もあれば、比較的従来の学力試験に近い方式の入試もあるというように、複数の方式の入試が実施されることになるのでしょうか。

複数の方式の入試を実施すること

は、「多様な背景を持った学生の受け入れを促進する」という観点からも必要です。というのも、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」という学力の3要素のうち、前者2つの学力に重点を置いた方式の入試もあれば、主体性や協働性が身に付いていることを重視する入試もあるというように、アドミツション・ポリシーに合った入試方式を複数採用することで、大学は多様な学生を選抜することが可能になります。

とはいえ今後は、書類審査や面接などを通じて、志願者の「主体性・

多様性・協働性」を測ろうとする入試の比率が増えていくことは間違いないありません。また、いわゆる従来型の学力試験も、単に「知識・技能」を問うのではなく、記述式や論述式の問題によって、「思考力・判断力・表現力」を測ろうとするものが増えていくと考えられます。

## 生徒の適性に合わせた丁寧な進路指導が不可欠に

高校の先生方の一番の関心事は、



かわしま・たつお◎名古屋大教育学部助手、神戸大学教育推進機構・大学院国際協力研究科教授などを経て現職。第8期中央教育審議会大学分科会(大学教育部会、大学院部会)臨時委員を務める。

「今回の入試改革で、大学入試が実際にどの程度変わるのか」ということだと思います。大阪大も、2017年度入試から全学部で「世界適塾入試」を実施し、入学定員の約1割を多面的・総合的な入試で選抜します。ただ、前述したように、各大学は志願者の多様な才能や経験を評価するための方法をまだ確立する過程にありますから、この先5年程度では目立った変化はないかもしれません。しかし、小さな変化の積み重ねの中

で、10年、15年先には大きく変わっていることが予想されます。特に次期学習指導要領の下で学んだ高校生が受験をする2025年度以降の入試は、より「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」を重視したものになるでしょう。

また、高大接続改革実行プランの中で、大学には、ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)、アドミSSION・ポリシーの3つのポリシーを策定することが求められており、今後は大学ごとの教育や入試の多様化・個性化が進んでいくことになると思われます。そうになると、高校現場の進路指導も、従来の指導だけでは不十分になります。各大学が、どのような学生を育てるために、どのようなカリキュラムで教育を行っているのか、また、入試ではどのような力を測ろうとしているのかを見極める必要があります。その上で、「この生徒の能力を開花させてくれる大学はどこか」を考えながら、アドバイスすることが重要に

なるでしょう。必ずしも難易度の高い大学が、その生徒に適した大学とは限りません。生徒一人ひとりの適性や個性に応じた丁寧な進路指導が不可欠になるわけです。

大学関係者としてぜひ高校にお願したいのは、情報開示の促進です。大学が志願者の学力を多面的・総合的に評価するためには、高校での学習歴や活動歴に関する情報を的確に把握する必要があります。「この生徒は高校時代にどんな学習歴や活動歴を持ち、本学に入学した時に、どのような力をどう伸ばせるか」といった観点で丁寧な選抜を行うためにも、高校側の情報開示が重要なのです。大学は今、様々な教育情報を「大学ポートレート」として公開することが求められています。同様のことが今後は高校にも求められるようになると考えられます。

特に将来、現場で中心的立場となる若手や中堅の先生方は、大学入試改革やカリキュラム改革の動きに常に目を向け、変化を敏感にキャッチしていくことが大切だと思います。

# 通常教科、合教科・科目、総合学習の三位一体で、真の学力を育む

2015年3月に1期生の卒業を迎えた伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校では、思考力・判断力・表現力を鍛える授業と定期考査、英語と公民・理科の融合科目の設置、起業をテーマとした「総合的な学習の時間」により、知識・技能にとどまらない総合的な学力の育成に努めている。大学進学後も主体的に学び続ける意欲・姿勢を、どのように育成しているのだろうか。

## 高校段階進級を見据えて「四ツ葉の学び」を設定

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校は、「四ツ葉の学び」として、「興味を喚起し関心を高めるための学び」「思考力を育成するための学び」「表現力を育成するための学び」を授業の柱に掲げている(図1)。この理念を打ち出したのは、1期生が4年生(高校1年生)に進級した2012年4月のことだ。1期生が高校段階に進級するのを見据えて、従来型の授業からの脱却を図るのが狙いだった。キャリア・グローバル担当総括の飯

塚秀彦先生は次のように説明する。

「入学から3年間、1期生は主体的に考え、活動し、発表する体験を授業で積み重ねてきました。それが、高校でいきなり講義中心の授業になっちゃったのでは、生徒を混乱させてしまいます。『学び続ける生徒の育成』という目標を実現するためにも、3つの学びを掲げ、先生方の共通理解を図る必要がありました」

知識の注入に特化した講義中心の授業ではなく、生徒が主体的に活動する中で、思考力・判断力・表現力や主体性・協働性を高める授業を追求したいという教師の思いが、「四ツ

葉の学び」として結実した。

そうした理念の下、同校はどのように生徒を育てているのか。通常教科、合教科・科目、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の3つの切り口で見えていく。

### 社会を多角的に見つめ 生徒の関心を喚起する

生徒の知的好奇心を高めるために教師が意識しているのが、多角的なものの方、多様な考え方に気付かせることだ。例えば、飯塚先生が担当する現代社会では、生徒は次のように「社

図1 「四ツ葉の学び」

#### (1) 興味を喚起し関心を高めるための学び

- ・視聴覚教材の積極的な活用と提示の仕方の工夫
- ・教科・科目独自の見方や考え方の多様さに気付かせる工夫
- ・教科・科目内容と社会とのつながりに気付かせる工夫
- ・多様な答えや考え方が出せる発問の工夫

#### (2) 思考力を育成するための学び

- ・授業で行ったことを確認する発問だけではなく、気付きから課題を見いださせ、なぜそうなるのか、なぜそうであるのかを考えさせる授業展開
- ・考査において、思考力を問う問題を積極的に出題する

#### (3) 表現力を育成するための学び

- ・グループでの話し合い活動、共同(協働)学習を積極的に取り入れる
- ・レポートなどにまとめる活動を積極的に取り入れる
- ・考査において、文章で答えさせたり図示させたりする問題を積極的に出題する

\*学校資料を基に編集部で作成

会保障」について学ぶ。

授業は「日本は豊かな国か」という教師の問い掛けで始まる。9割以上の生徒が「豊かな国」と答えた。そこで、教師が年間3万人前後で推移するグラフを示し、何を表すグラフかをグループで考えさせる。しばらくして、グラフが日本の自殺者数の推移であることを明かす。この辺



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 飯塚秀彦 いくさか・ひであひ 教職歴21年。同校に赴任して5年目。キャリア・グローバル担当総括、グローバル人材育成センター長。

### 伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

- ◎2009年、伊勢崎市立伊勢崎高校を前身に開校。教育目標は「自学・自律・共同・共生」。55分授業、全学年1学級30人とし、きめ細かい指導を展開。15年度、スーパーグローバルハイスクール(SGH)のアンシエイトに指定。
- ◎設立 2009(平成21)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約1200人
- ◎2015年度入試合格実績(現役のみ)
  - 国立公立大は、群馬大、千葉大、東京外国語大、東京学芸大、国際教養大、前橋工科大、首都大学東京などに38人が合格。私立大は、上智大、中央大、東京理科大、立命館大、関西学院大などに延べ226人が合格。アメリカ・ミズーリ州立大付属語学学校に1人進学。
- ◎URL <http://www.yotsuba-ss.ed.jp/>

## SPECIAL ISSUE

特集

# 高大接続改革とこれからの教師の役割

りから、生徒の価値観が揺らぎ始める。続いて、年齢別のグラフを見せ、高齢者ほど自殺者数が多いことを示し、そこから社会保障の仕組みや課題について深く学んでいく。

『なぜ、そうなっているのか』と

いう課題意識を持たせて授業に入らないと、生徒は何のために学ぶのが分からず、やらされ感だけが募ります。もはや大学入試という目標だけで、生徒の学習意欲を引き上げるのは難しくなっています。教育

### 図2 「現社通信」

**4-1・現社通信**

▶供給曲線の問題をつくってみよう

◎三三最近セブシヤ一の動物が人気である。そのため、生産が急いで行かない状況にあり、販売することができない。どうにすれば販売することができるのでしょうか。

A: 需要曲線を右に移動させよう。生産量(供給量)を増やそう。

◎ある食品が売れ残りが見込みに達し、価格を上げようとした場合、この食品の価格がどのように変化するか。

◎トマトが健康に良いという話が話題になり、スーパーなどにトマトを買いに来る人が増加した。この場合トマトの価格はどのように変化するか。

A: 需要量が増え、価格が上がる。

◎連休の週末に早生トマトが豊作となった。価格はどのように変化するか。

A: 価格が下がる(供給が増えるため)。

◎ある食品が健康に良いとニュースに取り上げられた。

A: 需要曲線が右に移動し、価格が上がる。

◎震災後、マダロの貯蓄量が縮んだ。

A: 供給曲線が左に移動し、価格が上がる。

◎あるメーカーのモバイル用有名メーカー電子辞書が販売された。この場合、今後のモバイルの価格がどのようになるか。

A: 供給曲線が右に移動し、価格が下がる。

◎ある食品の生産工場が火災に見舞われた。

A: 供給曲線が左に移動し、価格が上がる。

◎ある食品が手配不足に陥ったため、生産がしばらく停止された。販売停止になることになった。

A: 供給曲線が左に移動し、価格が上がる。

\*学校資料をそのまま掲載

の王道に立ち返り、教科の魅力や面白さを伝えることが、生徒の主体的な学びを促すには必須だと感じています(飯塚先生) 生徒の授業への関心を高めるためにICTも活用する。飯塚先生は、「Classi」(\*)で生徒に授業アンケートを取っている。毎授業後、授業で学んだことや教師への質問などを「Classi」に入力してもらい、その内容を一覧にして「現社通信」として生徒に配布している(図2)。

### 真の思考力を問う問題を 定期考査で出題

定期考査では、単に知識・技能を問うだけではなく、授業で学んだ知識・技能を活用して答える問題を出題している。15年度の現代社会の1学期期末考査では、コンプライア

紙でのアンケートでは、配布用として回答結果をまとめるのに時間が掛かるが、ICTを活用すれば、容易に回答結果の一覧を作成でき、生徒の考えも迅速に学級内で共有できる。 「生徒は書き込みながら授業を振り返るようになるので、学習内容の定着にもつながりますし、教師は生徒たちの書き込み内容から一人ひとりの理解度を確認できます。また、生徒同士で気付きを共有し、互いに刺激し合うことで、『自分ももっと書けるようになりたい』などと学習意欲の向上につながることも狙いとしています」と飯塚先生は語る。質問も共有できるため、生徒の疑問から授業をスタートさせるなど、授業の進め方にも生かしているという。

\* ソフトバンクとベネッセの合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

スやガバナンスの観点から社外取締役が必要とされているという新聞記事を例示し、外部出身者を取締役にする目的を説明させる論述問題を出題した。社外取締役については、授業で取り上げていない。初見の新聞記事の内容と、既に学習した株式会社の機能や取締役会の役割などの知識と合わせて考えることを通して、思考力を鍛えるのが狙いだ。

「教師は生徒に『考えてごらん』とよく言いますが、比較したり類推したりするものを設けていない限り、本当の思考力・判断力を問うているとは言えません。試験でも、文章を書かせさえすれば思考力・判断力・表現力を問う問題になると考えがちですが、単に覚えたものをアウトプットさせるだけでは思考したことにはなりません。比較・類推するものを設けて、もう一段階深く考えさせることで、真の思考力が育まれると考えています」(飯塚先生)

### 合教科・科目の学校設定科目で教科書の内容の理解を深める

英語の授業では、生徒が英語を使う必然性や話したいという意欲を喚

起することを重視している。そのため、中学校段階からコミュニケーション的な活動を多用すると共に、教科書の内容そのものを掘り下げ、テーマに対する関心を深めている。

もちろん、英語の授業だけでは、多様な分野にわたる教科書の内容の一つひとつを掘り下げていくことは、時間的にも、教師の専門性の観点からも難しい。そこで、同校では、英語と公民・理科を合同で行う合教科・科目型の学校設定科目として、5年生文型の「現代社会と英語Ⅰ」、6年生文型の「現代社会と英語Ⅱ」、5年生理型の「現代科学と英語」を設けた。文型では世界史や政治・経済などとの選択履修とし、理型は必修とした。

5年生理型でこの科目を必修としたのは、理系志望者には高校在学中から科学英語に親しんでおくことが重要だと考えたからだ。「生徒は『英語は文系が学ばばよい』と考えがちですが、大学で英語の文献を読む機会が多いのは理系の学生です。学会での発表も英語で行うのが一般的ですから、理系の生徒が大学進学後に戸惑うことのないよう、高校段階から科学英語を学ばせ、心

構えを持たせておくことが大切だと考えました」(飯塚先生)

### 生徒に必要なと思うことを教科の枠を超えITで実践

授業は、英語科と、地歴・公民科または理科(物理・化学・生物)のチーム・ティーチングで進める。「現代社会と英語Ⅰ」を例に見ていく。

教材は、同校の英語科教師とアメリカ・ミズーリ州立大付属語学学校が共同で作成したテキスト「Global Leadership Academy」。同校では、5年生1学期にミズーリ州立大で11日間の研修を実施しており、うち4日間は「グローバル・チャレンジズ」と題して、人口問題や資源問題、経済、科学技術、情報などに関する英語の授業を受け、関連施設を訪問する。その研修の事前学習に用いるテキストが「Global Leadership Academy」で、当日の講義と同じ7カテゴリーが設けられている。

授業は週4コマで、2週間掛けて1単元に取り組み。前半の4コマは、飯塚先生がT1となつて、単元にかかわる基礎知識やトピックを解説し、グループで調べ学習や発表を行う。

後半の4コマは、英語科教師がT1となり、テキストを読解し、飯塚先生がT2としてワークシートの記入やグループワークを支援する。

「現代科学と英語」は、英語科教師が科学の実験などに関する文献を選んで作成したテキストを用いる。物理科教師との合同授業では、英語科教師の指導の下、振り子に関する実験方法について述べた英文を読み、生徒が実験器具や方法を図示してから、物理科教師の指導によって実際に装置を組み立てて実験を行う。

「教科の枠にとらわれず、教師が生徒にとって必要だと思うことを実践的に取り組めるのが合教科・科目の良いところ。特に、英語や国語は他教科・他科目との連携が取りやすいので、この2教科を起点に他教科との合同授業を行っていくと良いかもしれません」(飯塚先生)

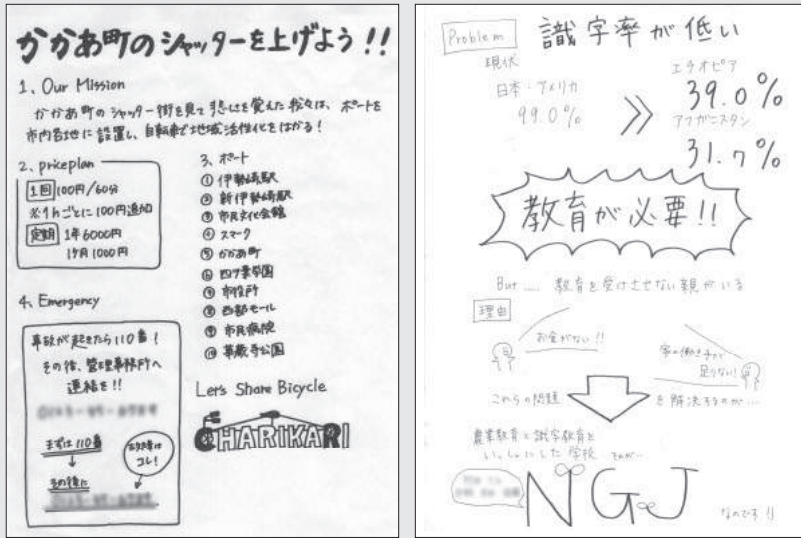
### 起業をテーマとした総合学習で主体性・協働性を高める

生徒の主体的・協働的な学習態度の育成と社会的な視野の拡大を図るため、5・6年生の総合学習では、「ソーシャル・ビジネスを立ち上げよ

う」をテーマとしている。ミズーリ州立大での研修との連続性を重視し、研修において、社会的・グローバルな課題について視野を広げたことを受けて、帰国後すぐに研究テーマを設定し、解決手段としてのビジネ

スモデルを発案する。「1年生から培ってきた思考力や表  
現力の集大成の活動であるのと同時に、ビジネスの視点を設けることで  
実社会へと視野を広げることが狙いで  
す。社会を変えるためには、周りの

図3 ソーシャル・ビジネス発表資料



\*学校資料をそのまま掲載

人たちと協力して継続的に取り組んでいく必要があることを、体験的に学んでほしいと考えています」(飯塚先生)

活動は4〜6人のグループ単位で行う。地域、高齢者、環境、教育などのカテゴリーを設定し、生徒の希望を基に、学年団が学級・文理混合のグループをつくる。学級・文理混合とするのは、協働の機会を多く設けやすいからだ。グループが出来たら、グループごとに解決したいテーマと

ビジネスプランを設定し、週1回の授業で研究を進めていく。その過程では、必ず一度は外部機関に取材を行う。生徒は自ら、大学、公共機関、企業、NPOなどに連絡して取材の約束を取り付け、訪問し、現状の課題やビジネスのヒントについて聞き取り調査を行う。訪問日が平日となった場合は、公欠扱いとしている。

研究の成果は、プレゼンテーションソフトを使って、ポスターと配布用のA4版プリント1枚(図3)にまとめて、6年生1学期末に発表する。発表会は全グループを無作為に4教室に分けて行い、生徒の投票で教室ごとに最優秀の2グループを選出、計8グループが全学年の前で発表を行い、成果を共有する。

### 大学進学後に力を発揮する四ツ葉の1期生たち

15年3月、1期生が巣立った。今、卒業生からよく聞くのは「四ツ葉での学びが、大学での学びに役立っている」という声だ。「他校出身の学生の中には、プレゼンテーションやレ

ポートで苦労している人が多いが、自分は違和感なく取り組んでいる」など、高校での学びで身に付いた力が、大学の学びに必要な力であったことに気付く卒業生が少なくない。

進学した大学以外で行う一般向けの講座やシンポジウムに積極的に参加する卒業生も目立つという。「様々な教育機会を活用して、主体的に学び続ける力の育成も本校の目標の一つです。大学卒業後もその気持ちを忘れず、自分自身を磨き続けてほしい」と飯塚先生はエールを送る。今後はSNSなどを利用して、卒業生へのアンケートを継続し、「四ツ葉の学び」がどのように花開いていくかを追跡していくという。

課題は、「四ツ葉の学び」を教師全員が確実に実践することだ。現状では、アクティブ・ラーニングや思考力・判断力を問う作問などに、全ての教科・科目が取り組んでいるわけではない。今後は、同校の教師なら誰もが「四ツ葉の学び」を実践できるようにノウハウの共有を進め、教師個々の指導力向上を図っていく。

# アクティブ・ラーニングと課題解決型 学習で、真のリベラルアーツを追究

2015年度、中高一貫校のかえつ有明中学・高校は、初めて高校入試を実施し、「学ぶことの楽しさ」を追究する新クラスを始動させた。合科目型の授業、アクティブ・ラーニングをベースに知的欲求を喚起する授業、論理的思考力・表現力を育てる「プロジェクト」など、特色ある教育を展開し、主体的に学ぶ生徒の育成を図っている。

「学ぶ楽しさ」を追究し  
多様な可能性を伸ばしたい

かえつ有明中学・高校は、東京湾に面する有明に位置する私立中高一貫校だ。中学1年生から高校1年生までの男女別学授業、論理的・批判的思考力を養う学校設定教科「サイエンス」（中学校）など、特色ある教育を展開し、例年首都圏の有力大学に多くの人材を送り出している。

長年、6年一貫教育を貫いてきた同校が、2015年度に初めて高校入試を実施したのは、大学入試を前提とした従来の進学校の常識にとら

われず、リベラルアーツ教育を追究するためだ。石川一郎校長は、「現在、地球規模で起きている問題は、従来の枠組みでは解決できないものばかりです。そこで必要になるのは、知識をひけらかす教養主義ではなく、『普遍性を志向する態度』ではないでしょうか。それこそが真の教養であり、価値観の違う人とも通じ合えるプラットフォームを形成していくことにつながるのです」と語る。

育成したい人材像は設定していない。それは、石川校長の次のような考えに基づく。

「ゴールを定めてそこに向かって

いくという逆算的な考え方は、教育の柔軟性を失わせ、かえって生徒の可能性を狭めてしまうことになるのではないのでしょうか。特定の価値観に基づいて目標を定め、みんなそこに向かっていくのではなく、生徒それぞれが個性を発揮しながら、様々な方向に可能性を広げていける環境を用意することが、多様性を育むという意味でも大切だと考えています」（石川校長）

協働学習は生徒が互いに  
認め合うところから始まる

新クラスの立ち上げは、授業を受

け持つ10人の教師が集まり、教育のコンセプトを固めるところから始まった。新クラスリーダーの福富高彦先生は次のように振り返る。

「既成概念を取り払い、『学びの本質とは何か』『現在の教育の課題は何か』というところから徹底的に話し合いました。そこで共有されたのは、知的欲求を喚起する授業を目指すことです。大学入試に有効か否かという考えはいったん横に置き、何よりも生徒が学ぶことを楽しいと思える授業を、生徒と教師が一緒につくり上げていく。その結果、生徒が更に深く学びを追究するために、国内・



かえつ有明中学・高校校長  
**石川一郎** いしかわ・いちろう  
 教職歴32年。同校に赴任して10年目。「学校は生徒一人ひとりが『未知』と出会う場」



かえつ有明中学・高校  
**福富高彦** ふくとみ・たかひこ  
 教職歴20年。同校に赴任して5年目。「教科書や教師を疑ってかかるくらいリテラルに考えられる生徒を育てる」



かえつ有明中学・高校  
**佐野和之** さの・かずゆき  
 教職歴21年。同校に赴任して2年目。教育統括部長。「存在そのものが尊く、僕はそれに寄り添うだけ」



かえつ有明中学・高校  
**金井達亮** かない・たつあき  
 教職歴13年。同校に赴任して2年目。「今、この瞬間を生きる。その積み重ねが真の自分をつくっていく」

### 東京都・私立かえつ有明中学・高校

- ◎嘉悦孝により日本初の女子商業学校「私立女子商業学校」として創立。大学生や大学院生のチューターが学習を支援する「学習支援センター」、図書・情報の拠点である「ドルフィン」など、独自の学習支援体制を展開している。
- ◎設立 1903（明治36）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約160人
- ◎2015年度入試合格実績（現役のみ）  
 国公立大は、千葉大、東京大、東京海洋大、東京工業大、首都大学東京などに9人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大学、明治大、早稲田大、立命館大、同志社大などに延べ442人が合格。
- ◎URL <http://www.ariake.kaetsu.ac.jp>

海外の大学を目指すというイメージを、教師間で共有しました」

そうしたコンセプトの下、高校入試に合格した外部進学生16人と、内部試験と面接に合格した内部進学生8人による新クラスが、15年4月にスタートした。

新クラスで行う教育の最大の特徴は、アクティブ・ラーニングを中心に据えた合科目型の授業だ。まずは、協働して授業に取り組む素地を学級内につくるために、生徒同士の関係性を深めるところから始めた。発声のトレーナーを招いて地声を出し合うエクササイズを行ったり、自分の人となりや学級内で共有したりする活動を通して、生徒同士が認め合う雰囲気や醸成していった。地歴・公民科担当の金井達亮先生は、その目的について次のように説明する。

「表面的に意見を述べ合うだけでは、質の高いものは生まれません。安心・安全の場をつくり、本当の自分を出せる関係性を築くことで、生徒一人ひとりの持ち味を発掘できると考えました」

### 日本史と世界史の合科目型の授業で複合的視座を養う

地歴・公民、理科を例に、授業の様子を見ていく。

地歴・公民は、世界史・日本史の合科目として展開する。1学期前半は、5月実施のイギリス・ケンブリッジ研修に関連し、幕末にイギリスに留学した伊藤博文ら5人の長州志士をテーマとした。授業は反転学習の手法を用いる。生徒は事前に教科書を読み、時代のアウトラインを把握。授業では、教師が更に深い内容や教科書には掲載のない情報を解説したり、グループ活動を行ったりする。

グループ分けは生徒同士の話し合いで決める。生徒それぞれが興味があること、深めたいテーマをA3用紙に書き、それを手に教室を移動し、似たようなテーマの生徒とグループをつくる。その後、グループごとに「5人はどういう人物だったのか」「当時のイギリスの様子」などのテーマを設定して協働で調べ学習を行い、調べて分かったことや気付きを

発表し、全員で共有した。

1学期後半は近代の帝国主義について学んだ。世界史の視点から帝国主義や諸国間の関係などを概観し、それらと日本のかかわりを、日本史の立場から補足していった。

1学期の期末考査は「帝国主義のプロパガンダ・ポスターを作りなさい」の1問のみ。設定は第1次世界大戦前の1870年～1910年で、日・米・英・仏・独・露から1か国を選び、労働者に向けたポスターを製作するというものだ。解答時間は60分で、解答用紙の右にポスター、左にその意図を文章で説明させた。「単に帝国主義について説明するのではなく、時代背景、各国の政府の方針、労働者の立場など、様々な角度から帝国主義を捉えることで、複合的に物事を考える視点を身に付けてほしいと思いました」と金井先生は出題の狙いを語る。

### クリティカルにロジカルに考える力を育成

理科は物理・化学・生物・地学の

合科目「理科総合」として展開し、自然科学の学び方を学ぶ。

1年生の1学期はまず科学哲学を学ぶ。与えられた問いをグループで話し合うが、生徒が出した答えに、教師は問いで返す。「生徒は思考を余儀なくされ、当たり前と思っていたことに疑問を持ち始めます。そして、次第に考える楽しさに気付いていきます」と福富先生は話す。最後に学んだことを意見文にまとめる。これはルーブリックで評価するが、生徒もその内容を理解しており、自己評価できることを目標としている。

別の授業では、気球の設計を目標に気球について学んだ。反転学習の手法を用いて、気球の原理を理解するために必要な調べ学習を課してから授業を行った。「定義や用語が分かっていても、気球の原理を理解するのは難しく、知識を与えられることがいかに簡単かを生徒は実感します。予習の効果もあり、授業では、知識を使いこなす真の意味を生徒は理解していきます」と福富先生は話す。

期末考査は教科書、ノートなどの持ち込みを可とし、思考にスポットを当てた出題とした。

2学期以降は、宇宙の誕生、地球の誕生、生命の進化について、科目にこだわらず展開する予定だ。

### 「プロジェクト」で生徒自身が評価のためのルーブリックを作成

教科・科目横断的な課題に取り組みながら論理的思考力や表現力を鍛える科目が、「総合的な学習の時間」に相当する「プロジェクト」だ。情報の収集・整理・分析・伝達のサイクルを通して、情報を自分なりに理解し、その内容を自分の言葉で相手に伝える能力を育むことが狙いだ。

授業はワークショップ形式で行う。1学期の前半は文具メーカーと協力し、新しい消しゴム作りに取り組んだ。まず、消しゴムを使用する様子を徹底的に観察し、どういう場面で、どのような使い方をしているのかを分析。その結果を生徒間で共有してから、消しゴムを切ったりつなげたりして、より使いやすい消しゴムを考案して発表し合い、最後に気付いたことや学んだことを、生徒同士で振り返った。

評価は、ルーブリックに基づいて行う(図)。1学期は「キャラクター」

図 「プロジェクト」用ルーブリック

自己認識表	組 番 氏 名	
学びを深めるための自己認識	【守=始】	【守=進】
Character 学ぶ姿勢	<input type="checkbox"/> 自ら学ぼうとする意識がない <input type="checkbox"/> 学習の進捗を怠り進まない <input type="checkbox"/> ノテがチャイフになりがち <input type="checkbox"/> モチベーションが持続しない <input type="checkbox"/> 課題・テーマにより姿勢が硬直 <input type="checkbox"/> どうすれば自分がよくなるかはわからない <input type="checkbox"/> 学習中とはしているが、雑踏が乏しく、実地に感がない <input type="checkbox"/> 自分の中で何が悪いかわからない <input type="checkbox"/> 自分が何をどうすればいいかわからない	<input type="checkbox"/> より高水準を目指して取り組む <input type="checkbox"/> 理解せず、自分の力を最大限に引き出す <input type="checkbox"/> 興味を持って学習する <input type="checkbox"/> 自律的に学ぼうとする。(自分から学びに行く姿勢をとる) <input type="checkbox"/> 考えのない課題にも取り組みようとする意欲がある <input type="checkbox"/> 学習に楽しみを感じられる <input type="checkbox"/> 学んだことを活かして新しいことを挑戦する <input type="checkbox"/> 知識、フィードバックなど自分から積極的に受け取る <input type="checkbox"/> 自分なりに計画を立てて実行できる
	<input type="checkbox"/> 自分の意見を押し通そうとする <input type="checkbox"/> 固定観念にとらわれる <input type="checkbox"/> 異文化に対して寛容になる <input type="checkbox"/> 大きな問題になると態度転換が起る <input type="checkbox"/> 依頼に自分の考えを述べ <input type="checkbox"/> 自分の意見をもつことができる <input type="checkbox"/> 自分の中で方向性を見出せる <input type="checkbox"/> 相手の意見がどんなものでも一歩認める <input type="checkbox"/> 人種・年齢など国や文化によって違うことを受け入れる	<input type="checkbox"/> 自分と他人が違うことを理解し、差別をしない <input type="checkbox"/> どんな意見があっても尊重する <input type="checkbox"/> 異文化をいろいろと理解する <input type="checkbox"/> 自分から新着を受けているか意識できる <input type="checkbox"/> 自分と違う考えから、必要だと感じた事柄を吸収できる <input type="checkbox"/> 物事を拡大し、お互い良い部分を探積極的に取り入れる <input type="checkbox"/> 他人の考えを認めようとして、実行できる <input type="checkbox"/> 自分の前にもある課題を様々な角度から考え、理解しようとする
Citizenship 多様な価値観への深い理解	<input type="checkbox"/> 自分の意見を押し通そうとする <input type="checkbox"/> 固定観念にとらわれる <input type="checkbox"/> 異文化に対して寛容になる <input type="checkbox"/> 大きな問題になると態度転換が起る <input type="checkbox"/> 依頼に自分の考えを述べ <input type="checkbox"/> 自分の意見をもつことができる <input type="checkbox"/> 自分の中で方向性を見出せる <input type="checkbox"/> 相手の意見がどんなものでも一歩認める <input type="checkbox"/> 人種・年齢など国や文化によって違うことを受け入れる	<input type="checkbox"/> 自分と他人が違うことを理解し、差別をしない <input type="checkbox"/> どんな意見があっても尊重する <input type="checkbox"/> 異文化をいろいろと理解する <input type="checkbox"/> 自分から新着を受けているか意識できる <input type="checkbox"/> 自分と違う考えから、必要だと感じた事柄を吸収できる <input type="checkbox"/> 物事を拡大し、お互い良い部分を探積極的に取り入れる <input type="checkbox"/> 他人の考えを認めようとして、実行できる <input type="checkbox"/> 自分の前にもある課題を様々な角度から考え、理解しようとする
<small>「Character(学びを深めるための自己認識)」「Citizenship(多様な価値観や視点の深い理解)をもつ課題を設定し、人種や年齢に異なる背景の異なる課題にも興味を持ち、持続性を持って取り組む」についての自由記述</small>		
【自分の気づき】	【チームメンバーから】	
【自分の気づき】	【チームメンバーから】	

生徒が作ったルーブリック。名称も、自身の状態を確認するのが目的である以上、評価という言葉はそぐわないという理由で、「自己評価表」から「自己認識表」に改められた。

\*学校資料をそのまま掲載

(学ぶ姿勢)、「シチズンシップ」(多様な価値観への深い理解)の2つを設定し、それぞれがどういう状態にあるのかを自己評価する。

当初は、3段階で評価する「自己評価表」を用いていたが、途中、生徒の意見を取り入れて評価方法を変更した。教育統括部長の佐野和之先生は、「授業を進める中で、徐々に生徒たちが評価軸に違和感を訴え始

めたのがきっかけです。それなら生徒が納得できるものにした方がよいと考え、ルーブリックの作り替えに参加する生徒を募りました」という。

その呼び掛けに7人の生徒が名乗りを上げ、放課後に集まって話し合い、他の生徒にもアンケートを取って、自分たちの実感に合ったルーブリックを作成した。段階評価はやめ、各項目にチェックを入れる形とし、自分の気付きや他者評価を自由記述欄に記入することにした。

「私たちが大切にしてているのは、今この瞬間を大事にすることです。何が起こるか分からないという意識を持ち続けながら、生徒が自分たちで動き出せる場を用意し、教師はファシリテーターに徹する。瞬間ごとに湧き起こる生徒の意欲や衝動を受け止めることが、生徒の可能性を広げることにつながると期待しています」(佐野先生)

### スパイラルに学ぶ英国研修で大きく成長した生徒たち

入学後間もない5月下旬〜6月上

旬には、ケンブリッジ研修が行われた。入学オリエンテーションという位置付けだが、課題探究の要素とコミュニケーション能力の向上を併せ持つ、密度の高い研修であり、その経験は生徒を飛躍的に成長させた。

研修の2週間、生徒は一般家庭にホームステイし、各種の研修やアクティビティに取り組む。1日の流れは次の通りだ。まず、午前は現地にある同校の研修所で3時間の授業を受ける。最初の2時間は、現地の英会話学校の教師から午後のアクティビティに関するテーマについて英語で学び、3時間目は、日本で準備した英語のプレゼンテーションを行う。午後はケンブリッジ散策やパンティング体験(\*)などのアクティビティに取り組む。例えば、飲料メーカーの工場を見学した日は、午前の1・2時間目に工場や商品の販売戦略などについて学び、午後は現地でグループごとに新製品を考案し、プレゼンテーションを行った。

午後にアクティビティをした後、ホームステイ先の家族にその日学ん

だことを伝え、当日の体験を日記に記す。翌日の授業では前日を振り返ってから、次の課題に入る。そのように、話し合いなどでテーマへの理解を深める場面、体験する場面、振り返る場面がスパイラル状につながっていくことで、自分の成長や気付きを意識化させていくのである。

この研修が初めての海外旅行という生徒もいるが、全員、ホームステイ先から研修所まで自分でバスに乗って通う。初日の開始20分程は、講師に話し掛けられても答えられず、顔を上げられない生徒もいたが、一度言葉が通じると自信を深め、みるみるコミュニケーション能力が上達していったという。「そばで見ている、生徒が1時間ごとに進化していくのが分かりました」と石川校長は振り返る。

### 生徒の企画で一般クラスとの合同「プロジェクト」が実現

新クラスの立ち上げから3か月。生徒たちの成長は著しい。1学期末には自分たちの活動を他クラスの生

徒にも体験してほしいという生徒たちの希望を受けて、一般クラスとの合同の「プロジェクト」を実施した。生徒が自ら、一般クラスの学級担任に掛け合い、自ら司会進行を務めて「未来の職業」をテーマにプレゼンテーションを行った。また、7月の学校説明会では、保護者や中学生に向けて新クラスでの学びをアピールし、会場から次々に投げ掛けられる質問に堂々と答えていたという。

「3か月間で生徒がこれだけ変わったのだから、私たちはもっと徹底して取り組んでいかなければならないと気持ちを新たにしました」と石川校長は意気込みを述べる。

今後の課題は、新クラスの成果を学校全体に普及させていくことだ。「新クラスで行われているような教育が生徒に必要なと理解できても、実際に行うのは容易ではありません。このクラスでしか出来ないことを追究しながら、日々成長していく生徒の姿から私たち教師が学び、自分たちの意識改革を行っていきたいと思います」(石川校長)

\*パントという小舟に乗ってケム川を遊覧するケンブリッジ観光の目玉の1つ。

# 変革の時代、生徒と共に 成長し続ける教師であるために

高校教育、大学教育、そして大学入学者選抜が三位一体となった教育改革が本格的に動き始めた。高校現場では改革をどのように受け止め、変わるうとしていくのだろうか。3人の教師が教育改革への思い、新しい指導法の必要性、そして学校内の意思統一の重要性について語り合った。

## 改革を通して自分が 変わっていく実感

**柏木** 三位一体の教育改革をどのように受け止めていますか。

**黒木** 基本的には、今回の改革が目指す教育の形は、理想の姿なのだろうと思います。中央教育審議会の答申を受けて策定された「高大接続改革実行プラン」が提示されたことで、5年後、10年後を見据えた教育について教師が意見を出し合い、学校全体で考える気運が高まったことは確かです。本校でも、今年度から学校全体でアクティブ・ラーニングの研究に取り組みことになりましたが、異論はほとんど出ませんでした。  
**長谷川** 改革に対する漠然とした不安

はありますが、今のままではいけないという意識が浸透していることも確かです。その意味で、私自身はこの改革は学校を変えるチャンスであり、この機会を逃したら学校として生き残れないという危機感を持っています。私自身、昨年進路指導部長に就任して様々なことを一から勉強していく中で、自分もまだ新しいことを受け入れられる、変わっていくという手応えを感じています。

**佐野** 中高一貫校である本校では、2015年度に初めて高校入試を行い、純粋なりべラルアーツを追究する1クラスをつくりました（P.18参照）。授業はアクティブ・ラーニングが中心で、知識の詰め込みはしない方針を先生方と共有して取り組ん

でいます。ただ、そうした教育が理想だとは分かっても、学校全体で新しい方針や取り組みに共通理解を持つことは、決して容易ではありません。長谷川先生のお話の中で、「自分自身も変わる可能性がある」と感じたというのは、とても重要なことだと思います。本当のアクティブ・ラーニングは、生徒をコントロールするのではなく、何が起るかわからない状況を教師が許容することが大切であり、教師自身も悩みながら生徒と一緒につくり上げていくものだと思います。今まさに変わっているという感覚を認識し、それを開示する姿勢は、アクティブな授業をつくる上で必要不可欠な要素ではないでしょうか。

**宮城県利府高校**

**長谷川弘和**

はせがわ・ひろかず  
教職歴12年。同校に赴任して6年目。進路指導部長。担当教科は英語。



## 生徒たちに「学習権」を 渡してみる時が来ている

**柏木** 高大接続改革のその先にあるビジョン、つまり、育成したい人材像をお聞かせください。

**佐野** 個別の能力、スキルに生き方を限定されることなく、自分の人生を生き抜こうとし、挑戦できる人になってほしいです。それこそが主体的に生きるということだと思います。

### 宮城県利府高校

- ◎設立 1984 (昭和59)年
- ◎形態 全日制 普通科・スポーツ科/共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2015年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、宮城大、山形大、福島大などに4人が合格。私立大は、尚綱学院大、仙台大、東北学院大、東北福祉大、宮城学院女子大、帝京大、東海大、日本女子体育大、日本体育大、明治大、明治学院大、立教大、神奈川大などに延べ178人が合格。
- ◎住所 〒981-0133 宮城県宮城県利府町青葉台1-1-1
- ◎電話 022-356-3111
- ◎URL <http://ritu-h.myswan.ne.jp>

### 宮城県立都城泉ヶ丘高校

- ◎設立 1869 (明治32)年
  - ◎形態 全日制・定時制/普通科・理数科/共学
  - ◎生徒数 1学年約280人
  - ◎2015年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、筑波大、名古屋大、大阪大、神戸大、広島大、九州大、熊本大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、宮崎公立大などに150人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大、宮崎国際大などに延べ212人が合格。
  - ◎住所 〒885-0033 宮城県都城都市妻ヶ丘町27街区15号
  - ◎電話 0986-23-0223
  - ◎URL <http://www.miyazaki-c.ed.jp/miyakononjoizunigaoka-h/>
- 東京都・私立かえつ有明中学・高校  
※学校プロフィールは、P.19参照。

す。どう生きたいのかを自分自身に問い掛け、そのために大学入試が必要ならば、それに挑戦する。そういった内発的な意欲を育む場をどれだけ教師が用意できるかが重要です。

**黒木** これからの人材像は、教え込みによって完成に近付けるものとは一線を画すのでしょね。思考力や判断力、主体性などの全てを高校卒業時まで完全に身に付けさせるのは現実的ではありません。そういった力や姿勢、態度を身に付けるための経験は高校の時から積んで、花開くのは大学や社会に出た時でも遅く



東京都・私立かえつ有明中学・高校  
**佐野和之** さの・かずゆき

教職歴21年。埼玉県私立高校での勤務を経て同校へ。同校に赴任して2年目。教育統括部長。担当教科は理科。

はないという感覚で十分ではないでしょうか。我々教師も完成した存在ではないのですから。

**長谷川** 定められた狭い枠の中での正解、成功を超えて、広い社会の中で他者と協働しながら新しい価値を探し続けることが出来る人が、これからの時代では必要とされているのだと思います。

**佐野** 「ここまで」という枠を決めること自体が、生徒の可能性を狭めることにつながっているのかもしれない。我々教師にも、「高校生はこの程度出来れば十分」という思い



宮城県立都城泉ヶ丘高校  
**黒木篤** くろぎ・あつし

教職歴24年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。担当教科は地歴・公民。

込みがないでしょうか。しかし、既存の教育のあり方とは違う、別の方法を提示すれば、生徒は際限なく伸びていくかもしれません。そろそろ、私たち教師の手にある「教育権」を、生徒に「学習権」として渡してみよう。時期が来ているのだと思います。

### 内面に抱いた違和感が主体性への第一歩になる

**柏木** 主体的な学びであるアクティブラーニングは、まさに生徒が「学習権」を手にした活動と言えるのではないのでしょうか。

**佐野** 内発的な動機が湧き起こった時に生徒が急速に変わっていく姿を、我々教師は何度も目にしてきました。そうした変革を起こすには、対話を始めた協働作業を通して、生徒が異質な他者と出会ったり、自分自身と向き合ったりする場面を



『VIEW21』高校版編集長  
**柏木崇** かしわぎ・たかし



気を醸成していくことが大切です。

**黒木** アクティブ・ラーニングについて生徒にアンケートを行うと、「同じクラスの友人が、自分とは違う次元で考えていることに驚いた」「これまで考えたことがなかった視点での意見が出てきて面白かった」といった感想がたくさん出てきます。そうした気付きの有無は、教科学力の高さとは必ずしも一致していません。毎時間の授業で、協働的な活動の場面をつくることで、「多様な意見がこの教室では受け入れられる」という安心感が醸成されれば、更に多くの生徒が自分の意見をためらうことなく出すようになると思います。

つくることが大切です。更に生徒同士が各々の考えを共有することで外界との関係性を築き、そこからもっと話したいという主体的な気持ち萌芽えていきます。そこそがアクティブ・ラーニングの意義だと私は思います。教師はファシリテーターに徹して、外界との関係性を探究する契機となる「トリガー・クエスト」を投げ掛けるなど、生徒たちが主体的に考えられるような場の雰囲気

### 教師同士が不安や悩みを共有することが大切

**柏木** 生徒に学習権を預ける一方、先生方にも課題発見力や解決力が求められるようになった時、実際に現場ではどのように改革を行っていくことになるのでしょうか。

**黒木** アクティブ・ラーニングの研究の気運が高まっている本校でも、アクティブ・ラーニングの研修を呼び掛けた時、反応が芳しくなかった時期がありました。今思うと、授業をアクティブ・ラーニングに完全に切り替えることを求められていると受け止められたのかもしれませんが、そこで、「授業中5分でもよいので、生徒が話し合う場面をつくる努力をしてはどうでしょうか」「失敗しても大丈夫です。軌道修正をしながら、数年掛けて形を整えていきましょう」と呼び掛けたところ、反応が大きく変わりました。先生方の内に秘められた授業改善の意欲を信じ、この1、2年の間に校内で成功体験を共有していければと考えています。

**長谷川** 本校では昨年度、5年後に向けた中期計画を立てる中で、利府

高校の問題点を洗い出し、「何が足りないのか」「どのような生徒を育てるべきか」について、先生方と1年間掛けて話し合いました。その中で、10年後、20年後の社会で活躍できる生徒、主体的に学び、課題発見・解決力を身に付けた生徒を育てるという目標が出来ました。その目標実現のために、授業をどう変えるかが次のテーマになります。先生方との目線合わせは出来たので、今以上にチームワークを意識して学校全体で考えていきたいと思っています。

**佐野** 本校で新クラスを立ち上げた時も、ビジョンや思いを共有することは実は容易ではありませんでした。腹を割って話すしかないと考え、管理職に新クラスの担当者だけが参加する合宿を提案したのです。合宿では、先生同士の関係性を深めるためにペアインタビューを行い、お互いのライフストーリーを共有しました。その上で、現在抱えている不安や悩みなどを洗いざらい語り合ったところ、先生方から「不安なのは自分だけじゃないことが分かった」「すごく安心した」といった声が上がりました。そこから空気が一気に

に変わり、新クラスの方向性などについて、ざつくばらんに意見を交わすことが出来るようになりました。

**黒木** 私も似た経験があります。前任校で学校全体での授業改善に取り組んだ時、まずは不安や悩みの共有から始めようと、校長の一声で、午後を丸々職員研修に充てたことがありました。会議の進め方も、研修部が一方的に説明するのではなく、グループを変えながら意見交換を重ねたところ、「目指すところは納得できる」と全員の目線が合ってきたのです。我々教師も、不安や悩みをさらけ出すことで、気持ちが一つにまとまるのだと実感しました。

### 数字で表せない価値を 粘り強く保護者に伝える

**柏木** 校内の意思疎通と共に、保護者や地域への説明も重要ですね。

**佐野** 入学前の学校説明会で「新クラスでは知識の詰め込みはしません」と明言したところ、「それで大入学入試は大丈夫なのか」「放課後の学習指導はないのか」などの質問が

出ました。「私たちは生徒の内発的な動機を大事にし、生徒が必要と考える知識を自分で獲得できるようにサポートします」と説明しました。1学期末には保護者の前で、生徒たちが「このクラスが社会に与えている価値」などのテーマでプレゼンをしました。一生懸命発表する姿を目にして、子どもの成長を実感した保護者も少なくなかったと思います。

**黒木** 言葉による説明だけで生徒の成長を実感させるのは簡単ではありません。本校でも、まずは生徒の姿を見てもらおうと、保護者の前で生徒に課題研究の発表をさせました。その上で、「これからの大学入試では、今日皆さんがご覧になったような力が必要になるので、ぜひ学校への後押しをお願いします」と伝えていきます。進学実績のようなデータで示すことが出来ない将来展望だからこそ、保護者や地域の方々に我々自身の言葉でしっかりと説明し、理解してもらおうことが、今後ますます重要になってくると思います。

**長谷川** 本校の教員が1年間掛けて

体験したように、地域や保護者とも時間を掛けて話し合い、思いをさらけ出すことが必要なですね。アクティブ・ラーニングの研究を含め、やるべきことは山積しています。まさに今、私たちが行動するチャンスなのでしょう。

### 生徒と一緒に場をつくり 共に成長していける教師

**柏木** これからの教師に求められる力は、どのようなものでしょうか。

**佐野** 将来、知識を教え込むだけの教師は必要なくなるでしょう。これからは、生徒が主体性や協働性を発揮できる場をつくる力や、探究のきっかけになるような問いを立てられるスキルが教師には求められると思います。生徒や他の先生方と一緒に授業をつくり、共に成長できる教師であることが大切だと思います。

**黒木** 知識を教える役割から、学び方を教える役割へと変わっていくように思います。ファシリテーターとしてのスキルを磨き、生徒をどのように導いていくのか、どのような

失敗をどう経験させるのかを、授業の中だけではなく、部活動や学校行事などの場面でも考えていくことが大切でしょう。現在は、教師も保護者も過保護になっていて、とにかく生徒を成功させようとする傾向があります。しかしそれは、もしかすると私たち大人が失敗したくないからかもしれない。「失敗を恐れるな」と生徒を励ますのであれば、私たちがまず失敗を恐れない姿を見せるべきです。生徒と一緒にチャレンジしていける教師でありたいです。

**長谷川** 私自身、これまでは大学入試を理由に、教師主導の知識の詰め込みを重要視する面がありました。しかし、生徒に社会の中でどう生きたいのかという志を育み、その実現に必要な力を身に付けるために、大学進学にも目を向けさせた時、高校の学習が生徒主体のものに変化するような気がするのです。生徒がこれからの社会や自分の人生について考える中で、彼らの視野を広げる指導を心掛け、私自身も生徒と一緒に変化し続けたいと考えています。

ハートを  
こがせ!

Vol.03

岩手県立大槌高校  
おつし

復興研究会

## 高校生の視点で 復興を支えながら 大きく成長する



### 様々な側面から 地域の復興に直接かかわる

岩手県立大槌高校の復興研究会は、全校生徒の3分の1に相当する80人が所属する大所帯だが、参加生徒の主体性を重視し、部長は置かず、その時々々の生徒の興味・関心や地域のニーズに応じて柔軟に活動を展開している。

現在の主な活動は、「町づくり」「キッズステーション」「定点観測」そして「他校交流」「広報」だ。「町づくり」では、東京大や千葉大の研究者の助言を受けながら、大槌町役場の方たちと新しい公園のあり方などを考えています。町の復興は大人がすること、高校生には荷が重いのと思う人もいるかもしれませんが、実際に新しい町のデザインや景観づくりに自分がかかわれていることに、大きなやりがいを感じます」(山崎さん)

「定点観測は、180カ所の風景を定期的に写真

に収める活動です。町の様々な箇所を撮影して感じるのは、がれきなどの処分が終わわり、復興事業は確かに進んでいるけれど、住宅再建はまだまだこれからだということ。実際、人が戻ってきかない地域も多く、コミュニティの再生は大きな課題です。町の風景をカメラに収める度に、将来も、地域の復興に携わりたいという気持ちがますます強くなります」(倉本さん)

「私が力を入れている活動の1つが、キッズステーションです。被災地には、仮設住宅に入り、地元の友だちと離れたことなどが理由で、外で遊ぶ機会の減った子どもがたくさんいます。キッズステーションは、夏休みなどを利用して、地域の児童センターに子どもたちの遊び場をつくる活動です。子どもたちと年齢が近い高校生だから出来る取り組みですし、家の外でたくさんの方々と元気に遊ぶという、子どもにとって当たり前のことが難しくなっている現状に目を向けなければ、

### 教師の思い

様々な人と接する中で  
生徒は豊かに成長する

くまがい  
熊谷一郎

復興研究会が力を入れている活動の1つが、全国に出掛け、復興の現状を伝えることです。私も、倉本くんたちと関西の高校などを訪問しましたが、本校の生徒が語る被災地の今に対して「もうすっかり元の生活に戻っていると思っていました」と率直に驚きの声を上げる高校生もいました。被災地の実情を全国の方に伝えるだけでも大きな意味がありますが、生徒にとつての最大の価値は、そうした交流を通じた自身の成長だと思えます。様々な年齢、立場の人と接し、多様な考えを吸収することで、生徒の世界は広がります。自分を語る言葉がどんどん豊かになる生徒の姿は感動的です。



くまがい いちろう  
教職歴27年。同校に赴任して2年目。  
生徒指導課長。復興教育担当主任。体育科。

仲間の存在があるから  
未来に目を向けられる

いুকこ  
松橋郁子

復興研究会の生徒を見て、いつも思うの

真の復興とは言えないと思うのです」（前川さん）

## これからの復興を支える 人材として成長する

復興研究会に所属する生徒のほとんどが他部と兼部しており、更に復興研究会の中で複数の取り組みに参加している者も多い。例えば、3年生の倉本さんは「定点観測」「町づくり」、そして全国の高校を訪問し、復興の現状を伝える「他校交流」にも参加。自由な時間はおのずと少なくなるが、それでも「地元の復興にかかわるだけでなく、他の高校生が体験できないようなことに挑戦させてもらっている」（倉本さん）と多忙さも厭わない。



復興の現状を広く伝えるため、全国で講演活動を展開。津波による被害の状況などだけではなく、ピーク時には1000人の避難者を受け入れた大槌高校で、当時の生徒が地域のためにどのように活動したのかを後輩たちが語り継ぐ。

被災地に住む生徒たちは、復興にはまだ多くの時間が掛かることをよく知っている。期待と不安が入り混じりながら、それでも笑顔で活動に取り組む生徒の様子を前に、同校の教師たちは「復興はまさに人づくりなのだ、私たち大人が生徒に教えてもらっている」と率直に語る。

「いろいろな人の考えを聞いて、自分の考えを更に練り上げるのは、考えることが苦手な僕にとっては最初は大変だったけれど、今では『将来、町をこうしたい!』といういろいろなアイデアが出てくるようになった」（山崎さん）、「防災教育と保育を融合させた、新しい取り組みを考えてみたい」（前川さん）など、これからの復興を支える生徒たちは目覚ましいスピードで成長している。

### 前川美里

まえかわ・みさと

3年生。「町づくり」「キッズステーション」「他校交流」に参加。ボランティア部と兼部。

### 倉本拓磨

くらもと・たくま

3年生。「町づくり」「定点観測」「他校交流」に参加。卓球部と兼部。

### 山崎大悟

やまざき・だいご

2年生。「町づくり」「定点観測」「広報」に参加。コンピューター部と兼部。

は、「楽しみながら、自分に出来ることを続けてほしい」ということです。高校生は、のめり込むとつい頑張り過ぎてしまいます。本当は、被災地で暮らしているだけでも大変なのです。無理はしないでほしいと思っています。でも、私の心配をよそに、生徒たちは皆笑顔で活動しています。津波が襲った場所を記録する定点観測も、1人で見ているとつらいことを思い出していますが、仲間と一緒にだから、「ここでよく遊んだよね!」と過去を受け入れ、その上で「ここがどんな場所になればいいのだろう?」と未来を語るきっかけに出来ています。仲間と取り組むからこそ、彼らは前を向けるのです。



まつし・いづみ

教職歴32年。同校に赴任して7年目。図書館長。復興教育担当副主任。

### 岩手県立大槌高校

◎福祉施設での介護体験・各種ボランティア活動などを通じて地域の人々と交流を深めながら、地域社会に貢献する人材を育成する。学校のある大槌町は東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受け、生徒の大多数が被災した。

◎設立 1919（大正8）年

◎形態 全日制／普通科／共学 ◎生徒数 1学年約80人

◎2015年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、岩手

県立大、都留文科大に2人が合格。私立大は、東北福祉大、

拓殖大、明治学院大などに延べ13人が合格。短大、専門学

校進学51人、就職44人。

◎URL <http://www2.iwate-ed.jp/oh/h/>

## 先行実施生への指導の振り返りから考える 新課程入試に向けた 2年生後半の指導のあり方

数学と理科が新課程での実施となった2015年度入試。

理科への対策が入試の成否を分けた学校も多かったのではないだろうか。

特に、2年生の2～3学期は、入試に向けた準備を整える上で重要な時期となる。

2015年度入試で実績を上げた学校は、この時期をどのように有効に使い、飛躍の足掛かりを得たのか。

### 学校事例 1

#### 福島県立橋高校

## 自学自習を重視する指導と 基礎・基本を徹底する指導を両立

### 3教科で課題量を調整し 学習バランスを保つ

福島県立橋高校は、国公立大に毎年100人以上が合格する進学校だ。2012年度入学生は、1年生7月の進研模試では過去5年間で最低の成績だったにもかかわらず、15年度入試では例年同様の実績を残した。この学年では、3年生5月までに国数英の基礎・基本を定着させることに力を入れ、以後すぐに理科と地歴・公民の学習を本格化できるように工夫した。

また、生徒の自主学習の習慣化にも1年生の頃から力を入れた。例えば、週末課題は内容を精選し、量を例年の半分程に削減。その上で、国数英の教科担当が学年会議で話し合い、生徒の様子や進研模

試の結果などから、気になる教科・科目は課題を増やし、他教科と調整した。この学年で3学年主任を

務めた宮本英雄先生は、「課題の量を増やすばかりでは、こなすだけで精いっぱい生徒や、答えを写すだけの生徒が出てきます。そのため、量を減らしもしっかり定着させられるように、授業の内容と強く結び付いている問題に厳選しました。生徒の状況に応じて量を調節すれば、各教科の学習バランスも保てると考えました」と話す。

### 朝学習と週末課題で 数学の復習を徹底

2年生1学期の時点では、7月の進研模試で小問集合の正答率の低さが目立つなど、数学の学習内容の定着度に不安があったため、

2学期以降は復習を徹底させた。朝学習では進度を緩めて、1年生の学習内容から段階的に学び直せるように自作プリントを課し、週末課題には基礎の習得を確認する問題を加えた。また、気掛かりな教科・科目の対策に注力するという学年団の方針通り、朝学習では数学に特化して学ぶ週を設け、週末課題では数学以外の教科・科目の量を減らして、生徒が数学の学習に集中しやすい環境を整えた。

「授業を柱とした学習を徹底させるといふ方針の下、国語や英語などの先生方が授業の充実に注力したことで、生徒の不得意分野への細やかな指導が出来たと思います。この時期に基礎・基本をしっかりと振り返らせたからこそ、2年生11月の進研模試で数学の成績が伸びたのだと考えています」(宮本先生)

2年生後半には、理科の対策も始めた。国公立大志望の文系の生徒は、1年生で「生物基礎」、3年生で「生物演習」を履修するため、学習した内容を忘れないよう、2年生の長期休業中に「生物基礎」の復習問題を課した。理系の生徒

には、2学期から朝学習の教科のローテーションに理科を加えた。

「物理と生物は授業の進度がやや遅れていたもので、朝学習の短い時間で効率よく習得できるように、基礎的な良問を精選しました。生徒の状況に応じて取り組ませ、早めの定着を図りました」(宮本先生)

### 上位層の姿を通して 中・下位層に自学自習を促す

2年生12月からは、受験生への切り替えに力を入れ、教師が手を離していく指導に重点を移していった。例えば、英語では、朝学習の方法を工夫した。難度の高い並べ替え英作文だけを課し、生徒が復習しやすいよう、出題数は良問を選んで3問に抑え、その日のうちに採点・添削して返却。生徒にじっくり考えさせようと、解答・解説は配布せず、教室後方の掲示板に貼るのみにしたこともあった。そのようにした理由を、3学年の英語担当だった木村哲也先生は、

「10～11月には、修学旅行や3年生引退後初めての部活動の県大会と、2年生が学校生活における責任を

自覚する大きなイベントが続きます。『自分から進んで取り組もう』という生徒の気持ちを高めることで、学習意欲も伸びやすいと考えました」と話す。

ただ、手を離す準備は、1年生の頃から進めてきた。学年集会では「2年生12月を境に受験生になるぞ」と繰り返し伝え、生徒への意識付けを重ねた。また、教科指導にも工夫を凝らした。英語では、先取りする学習習慣を身に付けさせようと、定期考査の1か月前から出題範囲を示した。更に、今後求められるようになる力を実感させるために、夏休みの特別授業では、半年後に受験する模擬試験の過去問題に取り組ませた。

そのような指導にして間もなく、上位層の生徒の学びに変化が現れた。英語では、朝学習の解答・解説が貼られた掲示板の前で、生徒が教え合う姿が見られるようになり、数学では、放課後の教室で自習する生徒が目立つようになった。すると、上位層の生徒の姿に触発される中・下位層の生徒が次第に増え、自学自習の輪は広がっていった。



福島県立橘高校  
宮本英雄  
みやもと・ひでお



福島県立橘高校  
木村哲也  
きむら・てつや

○「自主、自律、自立」の校是の下、真理を探究する精神と豊かな情操を培い、国家や社会の有為な形成者を育成する。○全日制/普通科/共学/1学年約320人○2015年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、北海道大・東北大・福島大などに151人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ422人が合格。

「手を離せば、上位層の生徒は学びに向かうと信じていました。ただ、不安もありましたから、生徒の様子は以前同様すっかり見守り、自主的に学習できるようにになれば、すぐに授業で褒めました。教師に努力を認められた生徒は喜び、『もっと頑張ろう』と思うでしょう。『自分も認められたい』と努力し始める生徒を増やすことにもつながったと考えています」(木村先生)

### 理科と地歴・公民の学習を 3年生6月から本格化

3年生では、4月のスタディー

兵庫県立加古川東高校

模試成績の反省点から、指導を転換  
上位層を伸ばし、基礎・基本も徹底

サポートで国数英の抜け漏れを洗い出させた。また、3年生4月の進研模試を5教科の記述力を測る試験と位置付け、国数英の完成度と6月以降の地歴・公民の学習の本格化に向けた現状を確認させた。「1年生の頃から生徒に繰り返し伝えてきた通り、5月を国数英の完成期とし、6月には理科と地歴・公民の学習に目を向かせました」（木村先生）

橋高校では、生徒が自主的に学ぶ集団づくりと、教師による行き届いた生徒の把握により、教科バランスの取れた指導を実現し、例年同様の大きな成果を上げた。ただ、進路指導には課題が残ったと、宮本先生は話す。

「動機があいまいなまま志望大を決めてしまった中・下位層の生徒がいました。本当に学びたい学問や、それを学ぶのに適切な大学・学部を、もっとじっくり検討させるべきでした。新課程での教科指導と進路指導の時間を両立できるように、1年生の頃からキャリア教育にしっかり取り組む必要があると考えています」

2年生7月進研模試の低迷  
学年団で危機意識を共有

普通科・理数科を有する兵庫県立加古川東高校は、15年度入試において、国公立大合格者が前年度の178人から219人に急増した。うち京都大合格者は前年比約3倍の14人、大阪大合格者は2倍の24名（いずれも現役のみ）という堅調な実績を上げた。躍進の起点となったのは、2年生半ばからの数学・理科の指導だ。7月の進研模試で数学の偏差値が大幅に下がり、学年団で危機意識が共有されたのを契機に、教科・進路指導を中心に軌道修正が図られた。当時、学年主任だった坂田充範先生は、「中だるみが顕著で、学習習慣が身に付いていない生徒が多く、

学習への目的意識も希薄でした。

このままでは秋以降、更に学力は下がり、11月の進研模試で大幅ダウンが予想されました」と振り返る。

8月上旬、学年団で緊急会議を開き、2年生後期以降の取り組みを検討。その中で、成績上位層の生徒を対象とした早朝補習の強化が改善案に挙げられた。同校では、月水金の7時35分〜8時25分に、希望者を対象に国数英を中心とした早朝補習を実施していた。それに加え、この学年では、2年生後期から木曜日に文系・理系（理数科を含む）の上位層を対象とした早朝補習を行うことにした。

「チームAAA」で  
文系上位層を意識付け

文系上位層の生徒を対象とした



兵庫県立加古川東高校  
坂田充範  
さかた・みつなり  
教職歴34年。同校に赴任して11年目。特別支援教育コーディネーター。



兵庫県立加古川東高校  
松下博昭  
まつした・ひろあき  
教職歴28年。同校に赴任して5年目。1学年主任。



兵庫県立加古川東高校  
福本寛之  
ふくもと・ひろゆき  
教職歴21年。同校に赴任して4年目。1学年担任。



兵庫県立加古川東高校  
長野拓弥  
ながの・たくや  
教職歴9年。同校に赴任して6年目。1学年担任。

○「自治創造「明朗親和」を校訓とする。2006年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。○全日制／普通科・理数科／共学／1学年約300人○2015年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大などに268人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、関西学院大などに延べ543人が合格。

補習は、当時、地歴・公民科担当の藤原千佳子先生（15年度他校に異動）が主催した「チームAAA」だ。攻め（Aggressive）の受験を志向し、難関大をあ（A）きらめず、模試のA判定を目指す。その内容は、数学科の教師が提供する入試の過去問題を使った演習、日本史・

世界史対策、学習計画表のチェック、進路相談と幅広い。

「難関大を目指す生徒の学習意欲を高め、学び合う集団をつくるのが狙いでした。本校は、理系クラスの数が文系クラスの倍というところもあり、理系の生徒に圧倒されてしまう文系の生徒もいます。チームAAAは、『文系の生徒も手厚く指導する』という学年団からのメッセージでもありました」と坂田先生は語る。

## 2年生後期の化学補習で難関大の入試問題に挑戦

この学年では、新課程入試を見据えて、早い時期から理科重視の方針を学年団で共有。学年集会でも「早めに理科に取り掛からないと間に合わない」「先輩の情報をうのみにしてはいけない」と理系の生徒に呼び掛けてきた。

加えて、2年生後期からは、上位層、及び上位を目指す理系の生徒を対象に化学の早朝補習を実施し、京都大・大阪大などの難関大の入試問題に取り組ませた。化学科担当の長野拓弥先生は、「出来る

だけ早く、入試を意識させることが目的でした。新課程の化学では、計算力が必要な理論分野が教科書の前半部分で取り扱われることになったため、旧課程では3年生にならないうと出来なかった理論分野の演習が2年生で行えるようになりました。レベルの高い入試問題にもあえて取り組ませ、解答のために必要なアプローチや、授業で習得した基礎知識の活用方法を中心に解説しました」と語る。

補習の参加者は、普通科と理数科の生徒約20人。普通科と理数科の生徒と一緒に補習に参加したことは、生徒たちにとって大きな刺激になったと、副学年主任を務めた松下博昭先生は言う。

「これまで、普通科と理数科が一緒に学習する機会はほとんどありませんでした。この学年の理数科は早くから理数科目の成績が良かったこともあり、一緒に補習を受ける中で、普通科の生徒にも『負けてはいられない』という意識が生まれたのだと思います」

それまであまり質問に来なかった生徒が頻繁に質問に訪れるよう

になるといった、補習以外の場面での行動に変化が現れ始めたのもこの頃だ。2年生11月の進研模試は理科がけん引役となり、例年以上に偏差値が大きく伸びたという。

中・下位層の生徒に対しては、3年間を通して、定期考査前の質問会や考査後の指名補習などを実施し、手厚いサポートを続けた。また、9月上旬の実力考査で順調に受験勉強のスタートを切らせることを目的とした、夏休みの課題を登校日に提出し、確認する「キープ・アップ・プログラム」も実施。教科ごとに対象の生徒を指名し、教科担当が課題をチェックした。

## 低迷した数学は基礎・基本を徹底

2年生7月の進研模試で大きく偏差値が下がった数学は、基礎・基本の徹底を図り、改善。数学科担当の福本寛之先生は、「新課程の数学は学習内容が増えたため、数学科では1年生から進度を速めるという方針でした。しかし、定期考査ではなかなか得点が伸びず、7月の進研模試でも偏差値を下げ

てしまいました。我々も改めて基礎・基本の重要性を痛感しました」と語る。

そこで、数学科では、教科書の内容をしっかり定着させる方針を改めて共有。生徒には様々な場面で基礎・基本の重要性を呼び掛け、夏休みの課題も教科書レベルの問題に取り組ませることにした。

2年生9月以降の早朝補習は、7月模試で得点率の低かった分野であるベクトルの問題演習に特化し、理系と文系に分けて10月の定期考査まで6回の補習を実施。更に、「数学Ⅱ・B」の教科書が終わる時期を見計らい、自主課題としてセンター試験の問題を中心とした自習プリントを全員に配布した。

理数科目の指導を軌道修正し、成果を上げた同校だが、残された課題もあるという。

「例年、課題や補習にきちんと取り組んでいるにもかかわらず、最後に力を出し切れない生徒がいます。そうした生徒が頑張っただけの成果が出せるように、今後も生徒たちを支援していきたいと思えます」(坂田先生)



北海道  
札幌北高校

進学実績向上

# 新課程入試の理科に対応 キャリア教育も見直し 志望進路を実現

◎北海道庁立札幌高等女学校として創立。1950年に現校名に改称し、男女共学となる。校訓は「寛容・進取・良識」。2013年から3年間、北海道教育委員会「北海道高等学校学力向上推進事業」アドバンスモデル理科(物理)推進校・国語協力校。

<b>設立</b>	1902(明治35)年
<b>形態</b>	全日制/普通科/共学
<b>生徒数</b>	1学年約320人
<b>2015年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、旭川医科大、小樽商科大、北海道大、東北大、東京大、東京工業大、一橋大、名古屋工業大、京都大、大阪大、九州大などに265人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ151人が合格。
<b>住所</b>	〒001-0025 北海道札幌市北区北25条西11
<b>電話</b>	011-736-3191
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.satsukita.ed.jp/">http://www.satsukita.ed.jp/</a>

変革のステップ

<p><b>背景</b></p> <p>◎例年、受験への切り替えが遅れがちなか、新課程入試の理科への対応が最大の課題に</p> <p>STEP 1</p>	<p><b>実践</b></p> <p>◎理科の休日補講の充実、キャリア教育の改善など、既存の取り組みを見直し、ブラッシュアップを図る</p> <p>STEP 2</p>	<p><b>成果</b></p> <p>◎東京大の現役合格5人をはじめ、過去3年間で最高の進学実績を上げる。取り組みを他学年に継承する方法も整備中</p> <p>STEP 3</p>
---	---	---

新課程入試における  
理科の負担増にどう対応するか

2015年3月、北海道札幌北高校では、東京大に5人、北海道大に91人が現役合格し、国公立大の現役合格者が177人と、過去3年間で最高の結果を出した。

「教科指導や進路行事などのあらゆる活動について、学年団の教師一人ひとりが最も効果的な指導は何かを考えながら取り組みました。何事もルーチンワークにせず、生徒のために何が出来るのかと活動の意義を問い続けましたが、結果に結び付いたと思います」  
進路指導部部長の小松旭先生は、このように振り返る。

12年4月の入学当初での、この学年の大きな課題は、新課程入試における理科の負担増への対応だった。同学年で副学年主任を務めた現1学年主任の小山浩二先生は次のように語る。

「本校では例年、2年生の終わりまでに国語・数学・英語を完成させることを1つの目標としています。そのため、理科や地歴・公民の補講は3年生から本格化する傾向がありました。加えて、7月の学校祭は3年生が中心になって取り組むため、受験生になる時期が遅れるのも例年の課題でした。出来るだけ早い時期に、入試への意識付けを行いたいと考えました」

## 休日補講の時間割を工夫し 学年全体で理科をバックアップ

最大の懸案である理科への対応では、学習内容がどれだけ増え、難しくなったのかを学年団で共有し、国数英の完成を目指しながらも、理科の学習に意識を向けるという指導方針を確認した。生徒には、2年生7月の学年集会で、大入試の理科の難化予想を説明し、2年生11月の進研模試を1つの目標として、理科の学習に早めに着手するよう呼び掛けた。進路指導部副



北海道札幌北高校  
小松 旭 こまつ あきら  
教職歴30年。同校に赴任して10年目。進路指導部部長。「生徒と共に学校生活を楽しむ」



北海道札幌北高校  
福士公一朗 ふくし こういちろう  
教職歴30年。同校に赴任して4年目。進路指導部副部長。「全体と部分の関連性を意識する」



北海道札幌北高校  
小松浩介 こまつ こうすけ  
教職歴25年。同校に赴任して14年目。1学年進路指導部。2014年度卒業生の学年主任。「ユーモアと柔軟性を忘れずに」



北海道札幌北高校  
小山浩二 こやま こうじ  
教職歴20年。同校に赴任して10年目。1学年主任。「厳しさも必要。合理的に考え、動く」

部長の福士公一朗先生は次のように説明する。

「新課程入試では理科の負担が大きく、国数英の完成を待っているのは、入試に対応できないと考え、生徒に例年よりも早く、学習への着手を促しました。更に、理科は旧課程の入試とは内容も量も全く異なることが予想されたので、先輩のアドバイスをうのみにしないように指導しました」

理科重視の方針に沿って、補講も工夫した。同校では毎年1年生から、土曜日に年15回、夏季・冬季休業中に各6日間の休日補講を行う。自由参加だが、出席率はほぼ100%だ。教科は、例年1年生と2年生前期は国数英とし、2年生後期から理科を始めていたが、同学年では夏休み明けから理科も補講を行うよう整備した。補講は土曜日・長期休業とも1日70分3コマで、2年生後期以降は1日5〜7科目を用意する。一昨年度までは、生徒に受講科目の選択を任せていたため、講習の連動性を考えられずに受講する者もいて、講習内容が有効に働いていなかった。そこで、同学年では、文系・理系の生徒にとつてそれぞれ効果的なモデルコースを考えて提示し、自分に必要な科目の学習の連動性に注意して選択するよう、担任が指導した。時間割は、例えば理系志望の生徒に必要な科目が同時刻に重ならないように配慮し、生徒が必要な科目を履修できるようにした。そうした指導の成果は、2年生11月の進研模

試に表れた。理科の得点率が高く、特に物理が高得点だった。それは後に、センター試験で同校の入試実績全体をけん引するほどだった。

## 理科のアクティブ・ラーニングで「分かったふり」をあまり出す

物理の好成績を支えた背景には、授業の工夫も大きい。物理科ではアクティブ・ラーニングを取り入れ、特に中・下位置の生徒の理解度や学習意欲の向上に成果を上げた。

方法は大きく2つ。1つは、2年生で全4回行うワークシヨップだ。放射線をテーマに、5、6人のグループで調べ学習をし、発表して、デイスカッションを実施する。教材はイギリスの高校の教科書。生徒に、理系分野における質の高い英文に触れさせることと、理科がどう社会につながっているのかを意識させるのが狙いだ。発表は紙芝居形式としており、生徒は自ら工夫を凝らして場を盛り上げるといふ。

放射線を取り上げるのは、答えのない問いを考えさせるためと、物理担当の福士先生は語る。

「サイエンスは必ず1つの答えが出るものだと、生徒は思い込んでいます。しかし、科学者によって見解が異なる分野はたくさんあります。科学だけでは解決できないこと、答えが出せないものがあることに気付いてほしいと思っています」

入学当初は、控え目な生徒が多い同校だが、ワークシヨップでは活発に意見を交換し、その後の授業でも積極的に質問するようになる。

もう1つは、普段の授業だ。福士先生の授業では、先生の解説は半分程度で、後半では生徒がグループで話し合い、演習に取り組み。この方法にしてから、物理が得意・不得意に関係なく成績が伸び、平均点が上がった。

「真面目にノートを取って分かったつもりになっている生徒が、教え合うことで、自分の理解があやふやなことに気付き、より深く理解しようという意識が強まるのだと思います。上位層の生徒が、友人に教えても理解してもらえず、悔しい思いをして更に奮起することも珍しくありません」(福士先生)

## 大学調べの成果を共有し 知らない大学へ視野を広げる

新しく取り組みを増やすのではなく、従来の取り組みの意義を問い直し、実効性を高めているところに、同校の特色がある。

それはキャリア教育の取り組みにも表れている。同校では、約20年前から「AGE16」という進路学習を行っている。これは、1年生9月から2か月間掛け、志望校や憧れの大学・学部について、学問内容、入試科目、研究室、卒業後の進路などを調べ、レポートにまとめる取り組

「AGE 16」のレポート(2014年度)

レポートは2枚にわたり、1枚目は自分がその志望大を目指す理由を述べ、2枚目では、志望大の入試科目、研究室などを調べてまとめていく。  
\*学校資料をそのまま掲載(今年度は更に改善して実施)

できた小松浩介先生はこう語る。「生徒や保護者の多くは、北海道大進学を希望します。実際、東京大に合格した5人は、入学時は北海道大を志望していました。しかし、様々な分野で世界に貢献するリーダーを育てるのも本校の使命。それには、顕在

みだ。優秀なレポートを冊子(図)にし、教室に置き、閲覧できるようにする。更に、同学年では、優秀者5人を選び、プレゼンテーションソフトで資料を作成、学年全体の前で発表させた。「1年生でまず視野を広げさせ、その後、現実を踏まえながら志望を焦点化させていくというのが、学年の方針でした。『AGE 16』の冊子を教室に置くだけでは、生徒の視野を広げるには不十分です。発表を聞くことで、これまで自分が関心のなかった大学について知る、文系の生徒が理系の学部を、理系の生徒が文系の学部を知る、また、他の生徒の選択基準や考えるポイントなどを知ること、視野が広がることを期待しました」(小山先生)

同学年の主任として取り組みを3年間主導し

## 「なぜこの取り組みを行うのか」を 学年団で徹底的に議論

毎年10月に行う東京大教員の進路講演会で

化した希望に応えるだけでは不十分です。生徒が自身の可能性に目覚めるよう、潜在的なニーズを掘り起こして更に発展させるキャリア教育が必要であり、『AGE 16』はその大きな役割を担っていると考えています」  
現1学年では、10月に行う2年生の科目選択に間に合うよう、例年より時期を前倒しし、夏休み前に「AGE 16」を始める。加えて、生徒の視野を更に広げるため、志望大以外の大学のレポートもまとめさせる予定だ。

も、新機軸を打ち出した。例年は先端分野の講演を聞くだけだったが、同学年では事前学習を実施。講演テーマの「バイオインフォマテイクス」について教師がまとめたプリントを生徒が読み、感想や気付いたことをまとめ、その中で優秀なレポートを進路指導部発信の「進路ニュース」に掲載し、講演会への期待を高めていった。事前にテーマについて理解を深めたことで、当日は多くの質問が講師に投げ掛けられ、後日、一つひとつ返答してもらった。

「単に毎年行っているから実施するのではなく、活動の目的を学年で議論し、一つひとつの取り組みの意義を確認して、味付けをしていったからこそ、効果が上がったのだと思います。学年団の教師が目的を共有したチームとなることで、あらゆる生徒の力を伸ばしていくことが出来ました」（小松浩介先生）

## 客観的なデータを活用して励まし 最後まで諦めない意欲を育む

同学年は、最後まで生徒に諦めさせない粘り強い指導を展開した学年でもあった。同校は徹底した第1志望校主義で、現実的な判断が求められる場面はあるにせよ、生徒を最後まで励まし続ける。

上位層の生徒でも、模試で思うような結果が出ずに挫折を味わうことは少なくない。そこで、

同学年では進研模試のデータを積極的に活用。過去の合格者のデータを見せ、「この時期ならまだ伸びる」「この点数でも合格した先輩はい」と声を掛け、折れそうな生徒の心を支えた。「教師が寄り添い、不安な気持ちを支えれば、生徒は安心できます。その際、大切なのが客観的なデータです。単に『頑張れ』と励ますのではなく、きちんと根拠を説明して学習方法を評価すれば、生徒は落ち着いて勉強に打ち込めるようになります」（福士先生）

今後の課題は、同学年の取り組みを、次年度以降も継承することだ。15年度も、福士先生ともう1人の前3学年担任が現3学年担当として配され、年度当初に指導内容や課題を伝える引

き継ぎの場が設けられた。既に休日補講を始め、多くの取り組みが、現3学年でも行われている。「今の3学年団も、前年度の成果や課題を受け止めて、良いものをどんどん受け継いでいこうという意欲に満ちています。今後は進路指導部も率先して学年間の橋渡しを行い、ノウハウの継承の手助けをしていきます。また、他校の取り組みや道外の情報を積極的に校内に向けて発信し、新しい風を吹き込んでいきたいと考えています」（小松旭先生）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 指導の実効性を上げ 学校の求心力を高める

1 学年主任 小山浩二

道内屈指の進学校である本校に赴任が決まった時、どのような生徒がいるのか、どのような授業をすればよいのかと、緊張したことを覚えています。しかし、どの学校であっても、高校生であることに変わりはありません。自己管理が完全に出来ているかといわれればそんなことはなく、教師が生徒の可能性を伸ばすためにきちんとかかわることが不可欠でした。

現在、学年主任を務める1年生には、現在の学力では合格が難しい学部・学科を志望する生徒も多くいます。現実的には達成が難しい挑戦かもしれませんが、生徒が本気ならば、実現のために最大限の支援をしていきたいと思っています。これまで、本校では成績と志望校については担任が生徒に指導をしてきましたが、この学年では成績と志望校の相関データを整理して学年に提示し、担任や学年団と情報共有をしながら、高い志望を育む指導を進めていきたいと思っています。

全校的には、生徒に対しての学校の求心力を高めていくことが課題だと感じています。塾に通い、学校の学習とのバランスが取れず、志望校に合格できなかった生徒が毎年います。本校の授業にしっかり取り組み、志望は実現できる。そうした信頼感を醸成し、生徒の気持ちを学校に向けさせ、学年・生徒が一丸となって入試に向かっている雰囲気をつくってきたいと考えています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2014年8月号指導変革の軌跡「長野県上田高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



◎校訓は「天分發揮」、教育目標は「友愛・自律・進取」。東大・国立医学部コース、難関大コースの2コース制。英語スピーチコンテスト（全学年）、広島平和学習（中3）、生徒有志による英字新聞作りなど、グローバル教育にも力を入れている。

<b>設立</b>	1982(昭和57)年
<b>形態</b>	全日制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約150人
<b>2015年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、北海道大、筑波大、東京大、東京工業大、名古屋大、京都大、岡山大、広島大、徳島大、香川大、九州大などに43人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、大阪医科大、関西学院大、川崎医科大などに延べ166人が合格。
<b>住所</b>	〒701-0206 岡山市南区箕島1500
<b>電話</b>	086-282-6336
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.okayama-h.ed.jp/">http://www.okayama-h.ed.jp/</a>

岡山県・私立  
岡山中学・高校

指導力向上

# 教師の意識改革を進め 学校全体で 生徒一人ひとりを見守る

変革のステップ

<p><b>背景</b></p> <p>◎受け身がちで自分に自信が持てない生徒が少なくなかった。生徒指導が徹底されていなかったため、生徒の規範意識も希薄だった</p> <p>STEP 1</p>	<p><b>実践</b></p> <p>◎生徒指導の統一、主体性を育むための行事改革、基礎学力育成のための指導改善など、総合的な改革を推進</p> <p>STEP 2</p>	<p><b>成果</b></p> <p>◎生徒の表情が明るくなり、積極的・主体的に活動に取り組む意欲が高まる。指導力向上に向けた教師の意識も向上</p> <p>STEP 3</p>
---	---	--

全校体制で着手した生徒指導が  
10年に及ぶ改革の幕開け

私立中高一貫校の岡山中学・高校は、例年、多数の国公立大合格者を出す。特に、2014年度から2年連続で国公立大医学科の合格者数が2桁となり、近年ではアメリカのトップ大学の1つであるコーネル大などにも合格者を輩出。現在、同校は、2014年度に就任した鷹家秀史<sup>ひでし</sup>校長の下、教科指導や学校行事、校内分掌など、大規模な学校改革の真ただち中にある。改革前、課題は山積していた。その1つが、生徒の気質の変化への対応だ。生徒は、素直で真面目な一方、受け身の姿勢が目立ち、自己肯定感が高くなかった。進学実績に影響は見られなかったが、学力を十分に伸ばし切れていないと感じる教師も少なくなかったという。生徒に自ら学ぶ意欲や姿勢を育む必要があり、そのためには、教師の意識改革、指導改善が必要だった。

同校の改革には前史がある。十数年前、現場の教師の働き掛けによって、生徒指導改革に乗り出したことが、現在に続く改革の始まりだった。10年前に赴任した生徒指導部長の中川英<sup>ひで</sup>先生は、当時を次のように振り返る。

「どの先生も熱心に生徒指導をしていますが、校内で指導方針が統一されていなかったために指導が行き届かず、容儀の乱れや時間を守らない生徒がいました。どのような生

徒をどう育てていくのかという意識が、教師間で共有されにくかったのかもしれない」

そこで、中川先生が中心となり、生徒指導部で作り上げたのが、生徒指導のしおり『岡山中学校・高校の生活』だ。これは、授業の受け方やノートの取り方、日常の礼法や服装、休み時間や放課後の過ごし方、図書館の使い方などを記載した、言わば「学校生活の教科書」である。

生徒がそれらを実践できるよう、中学校入学直後の4日間にオリエンテーションを実施。この期間は授業を行わず、校歌や校訓の意味を考



岡山中学校・高校  
**明楽 晃**

みょうらく・あきら  
教職歴21年。同校に赴任して22年目。進路指導部長。「何事も生徒目線・保護者目線で行動する」



岡山中学校・高校  
**中川 英**

なかがわ・たけし  
教職歴21年。同校に赴任して10年目。生徒指導部長。「マンネリは進歩の敵。常に新しいものを求める視野を持つ」



岡山中学校・高校  
**石井 大祐**

いしい・だいすけ  
教職歴15年。同校に赴任して10年目。広報副部長。「ティーチャーよりも、コーチャーとして生徒とかわる」



岡山中学校・高校  
**鷺見 香織**

すみ・かおり  
教職歴16年。同校に赴任して10年目。2学年主任。「Go and Try with a smile! 人にやさしく」

えたり、教師が生徒と一緒に通学路を歩いたりするなど、学校生活に慣れることを重視するようになった。それまでの同校にはない指導法に、当初は異議を唱える教師もいた。しかし、生徒が変化していくに連れて、そうした声はなくなっていった。2学年主任の鷺見香織先生は言う。

「生徒が教師の目を見て話すようになり、授業態度が格段に良くなりました。最も大きな変化は、生徒がきちんと敬語を使えるようになったことです。大人と対等に向き合っていて生徒と教師との距離が近くなったと感

じています」  
生徒指導の徹底により、生徒の間に教師の指導を受け入れる素地が出来たことが、教師の自信につながり、その後の改革に道筋を付けた。

### 学年団の持ち上がりを廃し、 1年間全力で指導する意識が定着

生徒の生活態度が良くなる一方で、受け身な氣質が気になるようになり、厳しい指導にも食らい付いてくるたくましさや、他人と異なる意見を述べる勇気などをいかに身に付けさせるかが課題となった。もっとも、そうした生徒の氣質は、教師のかかわり方にも一因があったと、広報副部長の石井大祐先生は語る。

「本校では、基本的に学年団は6年間持ち

上がりでした。生徒と長い時間過ごしていると、生徒が考えていること、欲していることが言葉にされなくても分かってきます。すると、教師はつい先回りして、声を掛け、助け舟を出してしまう傾向にあったのです。手厚い指導がかえって生徒の自立を阻んでいました。そして、学年が持ち上がることで、『来年またチャンスがある』という教師の考えの甘さを生んでいました」

そこで、14年度から6年間の持ち上がりをやめ、中高とも基本的に毎年、学年団の大半を入れ替えることにした。生徒は、毎年新しい先生と出会う中で自分を表現する方法を模索するようになり、教師は「1年1年が勝負」という強い気持ちで指導に臨むようになった。進路指導部長の明楽晃先生は、「新しい出会いが、生徒の殻を破るきっかけになっている」と指摘する。

「6年間の持ち上がりは、教師の生徒に対する見方や評価を固定化し、指導の幅を狭めていました。1人の生徒に多くの教師がかかわることで、個々の生徒を多面的に捉えられるようになったと思います。これにより、生徒の潜在能力を引き出せるようになりました」  
14年度には、「Classi」(\*1)を全校体制で導入。定期考査や模試の成績、部活動の実績、生活状況などの情報を、教師間で共有し、学校全体で生徒一人ひとりを支える体制が整った。ツールを統一したことで、若手教師だけでなく

\*1 ソフトバンクとベネッセの合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。



Classiの「生徒メモ」は、生徒の日々の情報を記入する欄。教師が気付いたこと、他の教師と共有したいことを記入すれば、すみやかな目線合わせが可能となる。  
\*学校資料を一部改編して掲載

ベテラン教師もしっかり活用している(図)。

「教師1人に1台のタブレット端末が配備されたので、いつでも生徒の状況を把握できます。『Classi』の情報を基に、部活動の試合の翌日、生徒に『昨日は活躍したらしいな』と話し掛けると、生徒はうれしそうな顔をしていました。生徒に声を掛けるきっかけを得られることで、生徒とのコミュニケーションが更に取りやすくなりました」(明樂先生)

## 生徒のアイデアを行事に取り入れ 主体性を育む

主体性を育むための工夫として、入学式や体育大会など、あらゆる学校行事に生徒が活躍できる場面を増やした。中学校の卒業式では、生

徒会の役員が増上でメッセージを述べ、入学式では、新入生や保護者の緊張を和らげようと、生徒がコミカルな寸劇を演じた。体育大会や文化祭では、競技種目の選別やユニフォームのデザインなどに、生徒の提案を出来るだけ取り入れた。「自分たちで学校を変えられる」と分かるに連れ、生徒から積極的にアイデアが出るようになり、自主的に朝練習を行うクラスも現れた。行事を通じて、生徒の視野を広げる工夫もしている。特に、進路観の育成や体験活動に課題があった中学校では、14年度に2つの活動を取り入れた。1つは中学2年生での職場体験だ。生徒自身が岡山市や倉敷市の企業の中から訪問先を探し、訪問の約束を取り付ける。

「事前に、訪問する職場に関係する社会問題を新聞やインターネットで調べ、訪問時にインタビューするなど、NIE(\*2)の要素を取り入れました。働く意義を知るだけでなく、社会問題に対して当事者意識を養うことにもつながっています」(鷺見先生)

## 生徒の経験値を高める 体系的な振り返り

もう1つは、中学3年生で行う「冒険合宿」だ。公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会(\*3)の協力を得て、生徒自らの力で困難を克服していく体験活動を行った。数人のチ

ームで協力して、4メートルの壁をよじ登ったり、高さ50メートルのつり橋をロープ1本で下りたりする。そうした実体験を通して、困難に思えることも、みんなで力を合わせれば乗り越えられることを、生徒は体で学んでいく。

冒険合宿の最大の特徴は、活動後の振り返りだ。これはアウトワード・バウンドのノウハウだが、一つひとつのアクティビティ後に「活動をしている時に何を考えていたのか」「どんな時に不安になったのか」などを具体的に語らせ、更に冒険合宿の終了直後や3か月後にも「あの時と今でどう違うか」を振り返らせる。

「漠然とした感想ではなく、自分の内面を振り返り、自分の経験を言葉にすることで、生徒は体験から得たものを自覚し、次に生かせるようになります。適切な振り返りをタイミングよく行うことで、生徒にとって行事の価値が一気に上がることを改めて感じました。一つひとつの行事の狙いを明確にして生徒に伝え、体系的な振り返りの手法を確立していきたいと考えています」(鷺見先生)

高校1年生では、イギリスのイートン校への修学旅行があり、生徒は更に視野を広げていく。

## 教科横断の授業研究、教材研究で 教師の指導力向上を図る

生徒の変容を受けて、同校が今、最も力を入

\*2 Newspaper in Education の略。新聞などを教材として活用する教育活動。  
\*3 イギリスで開設され、現在は世界30か国以上にネットワークを持つ非営利の冒険教育機関。

れているのが授業改善だ。そのための取り組みは大きく分けて2つある。

1つめは、14年度に始めた教科横断の授業研究だ。研究テーマは、「ICTの使い方」「双方向授業」など、互いの教科の専門的な部分からなくとも、議論できるものを設定。生徒との双方向のやり取りは成立しているか、ICTの使い方は効果的かなど、教科の枠を超えた議論が活発に行われた。

もう1つの取り組みは教材研究だ。教科ごとに、使用する教科書を見直し、指導法を話し合うなどして、指導を根底から問い直している。そうした議論を通して、学年ごとに押さえるべきポイント、身に付けさせるべき力は何かといった共通理解が形成されていった。

「ある教科では、生徒に高い学力を付けたいと、難易度の高い教科書を使っていました。しかし、議論の過程で、基礎を固め、難易度の高い問題に取り組むことで確かな学力が身に付いていく、という発想の転換が出来ました。そこで、標準レベルの教科書で、生徒が基礎から発展まで学習できるように、指導を見直したのです。教師には高い指導力が求められますが、生徒の意欲が高まり、学力も付いてきていると感じています」（明樂先生）

今後は、アクティブ・ラーニングや反転授業、ICTの活用などの研究を進め、講義中心の授業から、生徒が活動主体の授業への転換を図っ

ていく方針だ。

## 担任制度の見直し、補習の再検討など 組織的な改革を加速

生徒指導の見直しを起点に改革が始まって10年。今、学校は活気に満ちあふれている。

「生徒の顔付きが以前とはまるで違います。学校に早く来て、朝練習をしたり、自習室で学習したりする生徒が増えました。教師が生徒に一声掛けるだけでボランティア活動に参加するようになったのも、10年前には考えられなかった変化です」（中川先生）

教師の意識改革も進み、「教師は全ての生徒

の担任である」という考え方が浸透した。また、新しい取り組みにも、「どうせやるなら成功させよう」という前向きな雰囲気職員室にみなが持っているという。

新たな改革も進行中だ。組織面では、担任と分掌の力量を高めるため、本誌13年度2月号の当コーナーで紹介した鳥取県立倉吉東高校の事例を参考に、担任業務と分掌業務の切り離しも着手している。学習面では、放課後補習の改善を行っている。社会問題をテーマにしたディスカッションなどの言語活動、各種の外部検定試験の対策講座、百人一首などの教養講座といったような教科学習以外の内容も、放課後補習で取り上げていく予定だ。

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 生徒の満足度向上が 最大の広報戦略

広報副部長 石井大祐

鷹家校長との面談で、私自身が希望を伝え、広報部へ配属されました。いきなり副部長を任されたのには驚きましたが、熱心に取り組めば取り組むほど、やりがいのある業務であると分かってきました。

広報の仕事は、本校のことをより深く知るきっかけとなっています。校内の情報収集はもちろん、保護者、小・中学校の先生、塾の先生といった学校外の人と会って話すことで、外部から本校がどのように見られているのかを客観的に把握できるようになったからです。時には、「上位層への指導ばかりに力を入れる」「昔の進学実績にあぐらをかいている」など、厳しい意見もいただきます。それを学校に持ち帰り、先生方に伝えて意識改革を促すのも、広報の大切な仕事です。

若手教師に経験を積ませよう<sup>ほつても</sup>と、意欲やアイデアのある若手教師が各分掌の主任に抜擢されています。ベテランの先生方に支えられつつ、各分掌の業務をけん引していることが、本校に活気をもたらす原動力の1つになっていると思います。学校に活気が生まれ、生徒の満足度が高まれば、おのずとその魅力は外にも広がっていきます。生徒や保護者の声に勝る広報はありません。外部に情報を発信するだけでなく、着実に改革を進め、教育力を高めることが、最大の広報戦略といえるのではないのでしょうか。

今後も学校改革につながる広報のあり方を意識して、学校の内と外の橋渡しに努めたいと思います。

ビフォー  
アフター

1年生

# 夏休みの振り返り指導ツール

自校の指導ツールや分析方法を他校の教師と共に検討し、各校の生徒特性に合った形への改善を図る本コーナー。今回は、1年生の秋を充実させるための夏休みの振り返りと、9月以降の目標設定について検討する。

検討会メンバー



群馬県立  
下仁田高校  
高橋真人  
たかはし・まさと

教職歴13年。同校に赴任して7年目。1学年主任。生徒指導部。数学科。「物事に謙虚に、楽しく取り組む大切さを、自らの姿を通して生徒に教えたい」



東京都立  
青山高校  
鎌田邦広  
かまだ・くにひろ

教職歴27年。同校に赴任して3年目。主幹教諭。進路指導主任。数学科。「目一杯やりきった」そんな最高の笑顔で卒業してもらいたい」



宮崎県立  
延岡星雲高校  
柳井健二  
やない・けんじ

教職歴23年。同校に赴任して7年目。主幹教諭。渉外広報部長。英語科。「伯楽にはなれないが、スポットライト係となって、個々の良さを照らしたい」

群馬県立下仁田高校・高橋真人先生  
1年生夏休みの振り返りシート

### 夏休み振り返りシート

組 番 氏名

夏休みの課題を期限内にやり終えられたか	国語	終了	未
	地歴	終了	未
	数学	終了	未
	理科	終了	未
	英語	終了	未
夏休みの課題以外のものでも学習したことがあるか。あれば、学習したことを記入してください	<ul style="list-style-type: none"> <li></li> <li></li> <li></li> </ul>		
生活面(家庭環境など)で何か変化があったか	有	無	
生活リズムの変化があったか	有	無	
友人関係でトラブルがあったか	学校内	有	無
	学校外	有	無
部活動は充実していたか	していた	していなかった	
夏休み中に最も印象に残った出来事を記入してください			
その他、何かあれば記入してください			

## ビフォー

例年、夏休み中の課題を終えないまま9月を迎える生徒がいるが、期限を過ぎても必ず提出することを同校では徹底している。どの生徒が、どの教科・科目の課題を残しているのかを担当が把握するためのチェック項目。

高橋先生が最も重視する項目群。夏休み中の生活面での変化を早めに把握することが、1学年では特に重要だと考えている。基本的には夏休み明けの面談で生徒の正確な状況を捉えるのだが、面談に向けて事前に変化を洗い出すための機能として今回のシートに盛り込んだ。

狙いと機能

生徒の変化をキャッチし  
前を向かせる

群馬県立下仁田高校では、今年度、1学年主任となった高橋先生の発案で、夏休みの振り返りシートを学年共通の書式で使用する予定だ。生徒は夏休みの間、長期間学校から離れるため、生活習慣や学習習慣が乱れがちになる。また、それまでのクラスや部活動を中心とした友人関係に変化が生まれるケースもある。同校では従来、9月の面談でそうした変化を捉えてきたが、面談前に注意が必要な生徒をきちんと把握し、早期のアプローチを行うために、今回の振り返りシートを考案した。また、振り返りをさせながらも、生徒に2学期以降を前向きな気持ちで過ごさせるために、新たな目標設定につなげたいという思いもある。

## 検討

振り返りにとどまらず、  
9月からの決意も新たにさせたい

高橋 この振り返り

シートは、今年度の9月に初めて活用を予定しています。ぜひ、先生方から改善のアイデアをいただきました。シートを作る上で気を付けたのは、生徒が気軽に回答できて、目を通す担任にとっても負担にならないようにすることです。特に注意が必要な生徒をおおまかに把握し、その後の面談につなげられればよいと考えました。



鎌田 細かく尋ねてい

ないので、生徒が答えやすいですね。ただ、

質問の仕方はもう少し吟味してもよいかもしれません。高橋先生は「友人関係でトラブルがあったか」など、ストレートに尋ねていますよね。教師にSOSを発信したい生徒にはこれくらい直接的な質問の方が答えやすいのかもしれませんが、ネガティブな質問表現に構えてしまい、答えにくくなる生徒もいるでしょう。「友

人との思い出で、一番楽しかったことは？」と良い思い出を振り返ったあとで、「一番一緒に過ごした友人は？」と聞いて、「校内、校外」などの選択肢から選ばせてはどうでしょうか。



柳井 生徒の変化を見

逃してはいけないという高橋先生の思いが伝

わる、良いシートだと思います。ただ、今の内容だと担任と生徒との間を行き来するだけです。友人同士で話し合わせて、9月からの刺激になるものに出るとよいですね。例えば、ボランティアや探究学習など、

夏休みに取り組んだ活動を友人と紹介し合い、認め合えるような雰囲気をつくるようにしたいです。

高橋 本校の1年生は学習面での目標が持ちにくく、文理選択もモチベーションを高めることにつながりにくいため、高校生活への意欲を高める仕掛けも考えたいです。

柳井 本校でも、1年生のモチベ

## 課題と解決策

- 1 夏休み後の振り返りだけでなく、9月以降に目を向けさせるような項目を設ける
- 2 生徒のSOSをキャッチするために、ネガティブな表現での質問が適切かどうか、生徒特性を踏まえて吟味する
- 3 クラスの生徒同士で見せ合い、意欲を高め合えるようなシートを目指す

シオンアップは課題の1つです。だからこそ、本校でシートを作るなら、振り返りよりも未来を見据えた目標設定を重視すると思います。シートの下半分は7月の進研模試の結果を基に、今後の目標とその実現のための実行項目を書かせるのも一案です。

鎌田 夏休みを「出来た・出来なかった」という項目だけで振り返るのでなく、出来なかったことに対しては、その理由を分析させてもよいかもしれません。時間が足りなかったからか、方法が適切ではなかったからかなどを整理するだけでも2学期以降に生かせるでしょう。少しでも次に生きる振り返りにしたいです。

高橋 振り返りだけでなく、未来を語るようなシートにしたいですね。

## 学校プロフィール

## 群馬県立下仁田高校

◎全日制/普通科/共学/1学年約60人/2年次からアドバンスコース、ビジネスコース、カルチャーコースの3コースに分かれる  
◎2015年度進路実績(現役のみ)/4年制大進学4人、専門学校進学21人、就職36人

## 東京都立青山高校

◎全日制/普通科/共学/1学年約280人  
◎2015年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東京大、東京工大、一橋大、京大などに108人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ612人が合格

## 宮崎県立延岡星雲高校

◎全日制/普通科・フロンティア科/共学/1学年約200人  
◎2015年度入試合格実績(現浪計)/国公立大は、九州大、九州工大、熊本大などに33人が合格。私立大は、法政大、関西大、福岡大などに延べ147人が合格

検討会で明らかになった課題を踏まえ  
1年生「夏休みの振り返りシート」を改良!  
次ページで紹介します。

# アフター

## 夏休みの振り返りと2学期の未来予想図

組 番 氏名 \_\_\_\_\_

夏休みの振り返りは、シートの上半分に収める。夏休みの課題で出来ていないものについては、「いつまでに何をするのか」を明確に記入させる。学習面について更に詳しく聞く場合には、教科ごとに「しっかりと取り組めたこと」「思うように出来なかったこととその理由」を書かせる。

夏休みの振り返り	夏休みの課題を期限内にやりとげられましたか (未提出の場合は記入) 何を、いつまでにするのか		
	国語	終了・未 → ( )	
	地歴・公民	終了・未 → ( )	
	数学	終了・未 → ( )	
	理科	終了・未 → ( )	
	英語	終了・未 → ( )	
夏休みに何か変化はありましたか			
生活面(家庭環境など) 有・無 / 友人関係 有・無 / 部活動 有・無			
夏休み中に最も印象に残った出来事を記入してください			

12月の自分未来予想図	勉強	12月時点での理想の自分	実現のためにこう努力する
	部活動・行事	12月時点での理想の自分	実現のためにこう努力する
	進路やその他 地域活動など	12月時点での理想の自分	実現のためにこう努力する

シートの下半分には、12月を迎えた時点で「こうなっていたい」という目標と、その実現のために取り組みたいことを書かせる。

夏休み明けのクラス開きとして「12月の自分未来予想図」を生徒同士で話し合いながら記入させ、その後「夏休みの振り返り」を個別に書かせて担任が回収してもよい。

## 活用の流れ

夏休み前にシートの中の振り返り項目を確認させて、夏休みの過ごし方への意識を高める

夏休み明けに夏休みの振り返りをさせ、それを踏まえた

これからの目標を記入させる。  
なお、目標をペアワークなどによってクラスで共有する場合は、先に目標部分から記入させてもよい

シートを担任が回収し、必要に応じて面談を行う

### 改訂後の狙いと機能

#### 夏休みの振り返りと共に抱負を書かせて前を向かせる

1枚のシートを「振り返り」と「自分未来予想図(抱負)」の2部構成とした。上半分の「振り返り」では、未提出の課題をいつまでに提出するかを明らかにさせ、「次の提出期限までには確実に済ませよう」と気持ちを引き締め直すものとした。また、夏休み中の変化を尋ねる項目ではネガティブな表現を控えて、生徒がより答えやすくなるように配慮した。

下半分の「自分未来予想図」では、勉強や部活動など高校生活のシーン別に「12月時点での理想」

と「その実現のために努力すること」を記入させるようにした。また、こちらは前向きな言葉が上がりやすいため、生徒同士のペアワークなどを実施することで、クラス全体の意識向上に結び付けることも出来るだろう。

夏休みの振り返りと2学期の目標設定のどちらに重きを置くかは、学校の状況によって異なる。「2学期以降の抱負を重視する場合は、下半分のスペースを大きく取った上で、掲げた目標に対して『すべきこと』『出来ること』『したいこと』のいずれのレベルで達成したいのか聞いてもよい」(柳井先生)という案も出た。



ビフォー アフター

活用

1学期の成果を土台に  
あるべき自分像を描かせる



**高橋** 振り返りだけでなく、1学期と同じように目標を立てさせてみようと思います。模試や文理選択が学習意欲につながりにくい本校の生徒でも、**1学期を終えて高校生活の様子が分かったからこそ、「授業をもっと真面目に聞いて、1学期よりも良い点数を取る」といった言葉が出てきそうです。**

**柳井** 目標を書かせる際には「〇〇することによって、△△を実現する」という目標とための行動を語らせることが重要です。目標から逆算して、これからの取り組み方を考えることを習慣付けたいです。



**鎌田** 勉強、部活動、行事それぞれについて、「こう努力すること

で、こんな自分になっていたい」と宣言させたいですね。夢を語ることも大切ですが、その実現のための手段を語ることが、更に大切だと私も

思います。大きな夢や目標でなくてもよいので、「1学期は先生に言われたから宿題を出せた。2学期からは先生に言われなくてもやろう」と、自分にとって少し上の段階を目指すものでもよいでしょう。

**高橋** 宿題などを1学期にどこまで提出できていたかをチェックして、「2学期からも引き続きしっかりやろう」と呼び掛けてみたいですね。このクラスはここまででは出来ていたのだから、2学期はここから頑張ろうと、スタートラインを共有してもよいですね。

**柳井** 挨拶や掃除など、今まではきちんと出来ていたのに、夏休み明けから出来なくなる生徒はいます。ただ、それは**高校生活に慣れ、肩の力が抜けた証拠でもあり、私は思います。** 気の緩みが大きなほころびになっては困りますが、細かく指

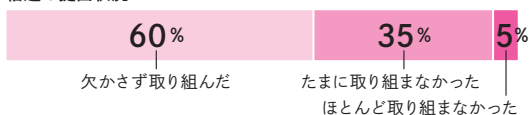
● 1学期に出来ていたことをクラスで共有する

◎ 1学期の状況チェックリスト (当てはまるものに○をする)

- |           |               |           |           |
|-----------|---------------|-----------|-----------|
| <b>宿題</b> | ・欠かさず取り組んだ    | <b>遅刻</b> | ・遅刻しなかった  |
|           | ・たまに取り組まなかった  |           | ・たまに遅刻した  |
|           | ・ほとんど取り組まなかった |           | ・ほとんど遅刻した |

◎ クラスの状況を集計

宿題の提出状況



※検討会議を基に編集部で作成

「2学期になって未提出物や遅刻などが増えることがないように、1学期では、このクラスはここまで出来ていたという成長を可視化しておきたい」という高橋先生の思いから考案したチェックリスト。生徒に自身の状況を答えさせ、集計結果を共有して、「12月の時点では、この数値を上回るように頑張ろう」と呼び掛けるようにする。

導しすぎず、生徒の主体性を育てたいという気持ちもあります。

**鎌田** 目の前の生徒の変化に、おおらかに向き合うのか、それともおおざっぱに対処するのか、2つの対応は似ているようで実は全く違います。おおらかな担任のクラス、学年は、大崩れしないものです。そして、規制が厳しい学年ほど、指導時に教師による温度差が生まれてしまい、おおざっぱな指導になることもあります。

**柳井** あまり細かく言いつぎると、「これをする」と怒られるかも」など

と萎縮し、文化祭などにおける生徒の主体性が損なわれてしまうことがあるように感じます。

**高橋** 「おおらか」と「おおざっぱ」をもっと区別したいと思います。多分、私の指導には、もっとおおらかであってよいところもあったはずで。一方で、学年主任としては、教師間の温度差は少なくしないといけないと思いました。振り返りだけにどまることがなく、2学期のクラス開きを前向きなものにするために、シートをうまく活用してみます。



半歩<sup>+</sup>未来<sup>+</sup>を考える教育オピニオン

# 「アグリマイスター顕彰制度」で 変わる農業高校教育

東京都立園芸高校統括校長

埼玉県立熊谷農業高校校長

東京都立瑞穂農芸高校校長

徳田安伸

竹本政弘

小堀紀明

2015年度、全国の農業系学科などに在籍する生徒の日頃の学習の成果や、資格の取得、技術・技能検定の合格などの実績を点数化し、「アグリマイスター」として認定する「アグリマイスター顕彰制度」がスタートした。

その創設において中心的な役割を担った3人の校長に、制度の狙いや特色、今後の展開などを聞いた。

## 農業高校の教育の質を保証し 分かりやすく社会に提示する

**徳田** 「アグリマイスター顕彰制度」（以下、本制度）創設のきっかけは、教育再生実行会議が提言した「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」にあります。提言の中で、生徒の学習成果を多面的に評価する方策の一例として、工業系学科・工業高校で

実施されている「ジュニアマイスター顕彰制度」が挙げられていました。改めて考えると、商業系学科・商業高校でも、資格取得のための支援が充実しています。ところが、農業系学科・農業高校には、そうした仕組みがありませんでした。社会で求められる力が変化し、更に大学入試改革も進む中、農業高校の教育の質を保証し、分かりやすく社会に提示できる制度が必要だと考えたのです。

## 「アグリマイスター顕彰制度」の狙いと内容

◎教育再生実行会議は、2013年、「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（第四次提言）を提出。高校教育の質の確保・向上の方策の1つとして、職業分野の資格などを活用し、生徒の多面的な学習成果を評価し、進学や就職に生かすための仕組みを充実するよう求めた。それを受けて、全国農業高等学校長協会は、15年4月、生徒が身に付けた様々な知識・技術・技能を総合的に評価する「アグリマイスター顕彰制度」を創設した。全国各地で開かれる競技会・コンクール、各種資格や検定などを、「農業関連（全国規模）」、「一般教養・基礎力を測るもの（全国規模）」、「それ以外」の3つに区分し、重み付けをして点数化。合計点に応じて、「アグリマイスターシルバー」「アグリマイスターゴールド」「アグリマイスタープラチナ」の称号を授与する。合計点のうち3分の2以上は農業に関するものであることと規定した。称号の認定は、毎年8月と2月に実施。更に、アグリマイスターゴールド以上の取得者、及び指導に成果があった学校の中から、特に優秀な生徒及び高校を、毎年2月に特別表彰する。

# PROFILE



東京都立園芸高校統括校長

## 徳田安伸

とくだ・やすのぶ

◎教職歴 35 年。同校に赴任して3年目。東京都立総ヶ丘高校統括校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会理事長。

埼玉県立熊谷農業高校校長

## 竹本政弘

たけもと・まさひろ

◎教職歴 34 年。同校に赴任して2年目。埼玉県立川越総合高校校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会副理事長。



東京都立瑞穂農芸高校校長

## 小堀紀明

こほり・のりあき

◎教職歴 32 年。同校に赴任して3年目。東京都立農産高校副校長等を経て現職。全国農業高等学校長協会副理事長。

**竹本** 農業高校には、農業、園芸、畜産など、多様な学科があり、生徒の学習の目的や意欲は様々です。中には、入学後、専門的な学習への意欲を持ちにくくなる生徒もいます。生徒が目標に向かって学習に意欲的に取り組むようにするには、どうすればよいのかという課題もありました。本制度によって、生徒が資格取得や競技会出場に積極的になり、専門教科を学ぶ目的意識を高めてほしいという思いもあります。

生徒の日頃の学習を適切に評価し、更に進路にも活用できる制度とするために、どのような資格や検定、活動を顕彰の対象とし、取得した級や段、獲得した成績を重み付けして評価するかということでした。

農業高校関係者などにヒアリングしたところ、「アグリマイスター」であるならば、農業に関する知識・技術・技能だけを評価すればよいのではないかとという意見が多数ありました。ただ、現代の知識基盤社会を生きていくために

は、基礎学力や一般教養もしつかり身に付ける必要がありますし、そもそも農業は応用学問ですから、基礎学力なくして、農業の専門知識や技術を身に付けることは出来ません。また、進学や就職に生かせる制度とするためには、農業の知識・技術だけでなく、基礎学力や一般教養も十分身に付けている生徒に称号を与えているということを、社会に示す必要もありました。

そこで、「アグリマイスターシルバー」(30点以上45点未満)、「アグリマイスターゴールド」(45点以上60点未満)、「アグリマイスタープラチナ」(60点以上)のどの称号においても、全得点の3分の2は農業関連での得点、3分の1は学習指導要領で求められている学力を保証する資格や検定などでの得点とし、双方の力が身に付いていることを保証する制度としました。

**竹本** 得点の対象となる競技会やコンクール、資格・検定は、「農業関連(全国規模)」「一般教養・基礎力を測るもの(全国規模)」「それ以外」の3つに区分しました(P.46図)。更に、成績や級・段に応じて、S(30点)〜F(1点)の得点に換算し、その合計点により、称号の認定を行います。

農業高校には、約9万人の生徒が在籍しています。そのうち「アグリマイスタープラチナ」の取得が見込まれるのは、100人程度です。決して簡単に取得できる称号ではありませんが、普段の学習の積み重ねがこの称号につなが

ることをしっかり認識して、頑張つてほしいと思います。

## プロジェクト学習で培った 汎用的能力も評価する制度に

**徳田** 生徒の学校での日頃の頑張りを評価に含めることは、戦後、農業高校での教育の核を担ってきた「日本学校農業クラブ連盟（FFJ）」での成果を得点化させることで実現しました。

FFJは、農業高校の生徒による自発的・自主的な組織です。その活動は、学習指導要領にも位置付けられ、授業にも組み込まれています。活動の柱は、生徒自らが農業に関する研究テーマを決めて、個人やチームで研究を進める「プロジェクト学習」です。それらの学習は、今まさに高校教育で充実が求められているアクティブラーニングであり、それを農業高校では既に何十年にもわたって行ってきたのです。

活動の成果を発表する場としては、まず校内での発表大会があります。校内大会、県大会、ブロック大会を勝ち抜いた個人・チームは、全国大会に進んでいきます。大会には、農業鑑定競技会、農業プロジェクト発表会、農業意見発表会など様々なジャンルがあります。

**小堀** FFJでの活動の成果は、これまで「科学性」「社会性」「指導性」の3つの項目で評価するFFJ検定（初級、中級、上級、特級の4段階）で評価してきました。

本制度では、FFJ検定に加え、農業プロジェクト発表会、農業意見発表会などでの成績を点数化して組み込んでいます。つまり、課題発見・解決力、探究力、リーダーシップ、コミュニケーション力などの汎用的な能力を有していることを、本制度によって保証しているのです。

**竹本** 農業高校で行われる実習は、グループでの作業も多く、協働学習も多く取り入れられています。また、生き物を扱うことから、長期休業中にも水やりや餌やりの当番が必ずあり、思いやりの心や責任感が育まれていきます。

汎用的な能力は、これまでの大学入試では十分に測ることが出来ていないと思います。しかし、アグリマイスターの称号を持つ生徒には、そうした能力があることを保証できます。本制度により、農業高校の生徒の進路が大きく開けるものと期待しています。

## 地域に密着した農業高校の活動が 地方創生の一端を担っていく

**徳田** 昨今、地方創生が盛んにいわれていますが、私は農業高校の生徒が地方創生の鍵になると考えています。農業高校では、「地域の資源を活用して産業を興す」という地元密着型の教育を行っています。高校の学習を通して、地域の課題に取り組んできた生徒はごく自然に地域への課題意識を持ち、多くの生徒が地元企業や団体に就職します。高校時代から地域に根差

### 図 アグリマイスター顕彰制度 区分例（抜粋）

- 区分A（農業関連）  
FFJ検定、農業プロジェクト発表会、家畜審査競技会、農業情報処理競技会、日本農業技術検定、実験動物2級技術者など
- 区分B（一般教養・基礎力を測るもの）  
日本学生科学賞、実用数学技能検定、全国高校生クリエイティブコンテスト、ICTプロフィেশンシー検定（P検）、簿記検定試験、語彙・読解力検定、秘書検定など
- 区分C（A・B以外）  
GTEC for STUDENTS、ビジネス実務マナー検定など

\*全国農業高等学校長協会の資料から抜粋。詳しくは下記サイトを参照。  
<http://www.zennokocyokai.org/>

してきた生徒が地域で活躍していくことが、地方創生につながるのではないのでしょうか。

実際、農業高校が中心となり、生産した商品を海外や大都市圏で販売したり、生産物を加工して付加価値を付けて販売したりして、地域の活性化に寄与しているというケースが増えていきます。そのような経験と知識・技術を兼ね備えた質の高い生徒にアグリマイスターの称号を与えることで、生徒が自信と誇りを持って社会に出て行けるようになればと願っています。

**竹本** 農業高校は、普通科高校と比べて普通科目の単位数が少ないため、どうしても基礎学力の面では課題があると見られる傾向にあります。学び直しや資格取得の支援などをしていかなければならないのは確かであり、本制度がそ



の一助になればと考えています。

一方で、生徒の実践力は高いと感じています。農業高校では、生産技術の向上はもちろんのこと、加工や流通についても学べるようになっていきます。例えば、栽培したトマトを加工業者に出荷し、キムチに加工した上で大手デパートで高価格で販売したり、スイカを海外に売り出したりといった試みを成功させている高校があります。単に作るだけでなく、ビジネスとしての成功という観点でも実践的に学んでいるのです。そうした実践は、活躍の幅を広げると共に、

農業の技術だけでなく、一般教養なども重要であることを実感する場にもなっています。

社会の中で、生産から販売まで一貫して手掛ける経験をしたり、その過程で地域の人たちとの交流を経験したりすることで、学びの幅が広がり、学習意欲を高めていく生徒は大勢います。FFJの活動や毎日の実習、幅広い体験型の授業など、農業高校には生徒の主体的な学びを後押しする、様々な仕組みがあるのです。

農業高校の生徒は、引っ込み思案で、最初は受け身の生徒も多いのですが、教師が少し声を掛け、進む方向を示すことで、行動を起こし、そこで達成感を得て、次のステップへと進んでいきます。伸びしろは非常に大きいですし、本制度をうまく活用できれば、生徒の意欲を更に高めていけると考えています。

**小堀** 本制度には、一定の成果を上げた高校への表彰制度もあります。これは、生徒の資格取得の指導に力を入れている先生方への評価にもつながり、学校全体の活力を高めることにも役立つのではないかと考えています。

### 称号を得た生徒が社会で活躍する それが制度浸透の鍵

**徳田** 本制度は今年度が始まったばかりで、まだ課題もあります。現在、農業系の学部・学科を持つ大学に本制度の説明を行い、入試への活用を依頼している状況です。趣旨に賛同し、ゴー

ルドやプラチナのアグリマイスターを持つ生徒に対して、入学金の免除や授業料の減免といった優遇措置を検討している大学もあります。少子化が進む中、大学も質の高い学生をどのように確保するかが最大の課題です。全国農業高等学校長協会が本制度で生徒の質を保証することで、大学にとっても質の高い生徒を受け入れやすくなるというメリットがあると思います。

**小堀** 得点の対象となる資格や検定、コンクールなどを精査していくことも課題です。検定やコンクールは、全国的に認知されているものから、地域独自に実施しているものまで、多種多様です。それらを重み付けして点数化するのが難しく、今後の申請状況などを見ながら、現状の区分を見直していこうと考えています。また、全国の農業高校に通知し、FFJを通して生徒への浸透を図っていますが、本制度自体の認知もまだまだこれからです。アグリマイスターを取得することが農業教育のスタンダードとなるように、試行錯誤を重ねながら本制度を普及させていきたいと思っています。

**徳田** 何よりも、アグリマイスターの称号を得た生徒が社会で活躍してくれることが、この制度を社会に浸透させるためには不可欠です。本制度で農業教育を変える！ そのような気概で、制度をより活用範囲の広いものにしていくのと同時に、生徒たちを全力で支援していきたいと思います。

# 「トビタテ！ 留学JAPAN」 日本代表プログラム高校生コース 壮行会開催レポート

「トビタテ！ 留学JAPAN日本代表プログラム」は、グローバル化に対応する人材育成を強化するため、国が企業や団体と連携し、海外留学を支援する制度だ。従来、大学生を支援対象としていたが、2015年度に高校生を支援対象とする「高校生コース」を新設した（詳しくは本誌2014年12月号を参照）。「高校生コース」第1期生の留学を目前に控えた2015年6月、その壮行会が文部科学省で行われた。当日の様子をレポートする。



## 生徒は志を語り合い 留学への意欲を高める

壮行会の会場には、全国の高校から選ばれた「高校生コース」第1期生297人（\*）が集まった。

第1部では、まず、下村博文文部科学大臣と、支援企業・団体の代表である北山禎介<sup>ていすけ</sup>三井住友銀行取締役会長が、海外留学の意義を強調し、激励の言葉を贈った。次に、第1期生を代表して2人の高校生が登壇し、留学への決意と将来の抱負を力強く語った。第2部の懇親会では、互いの志を熱く語り合う第1期生の姿が多く見られた。そこでよく聞かれた

### 激励の言葉

**国際社会を生きる素養は  
留学で身に付けられる**



文部科学大臣  
下村博文氏

◎グローバル化や情報化が進んだ今、世界は瞬く間に大きく変化するので、今までにない課題に直面することも増えるでしょう。そこで、今後の国際社会を生き抜くためには、主体的な課題解決力、より良い方法を考える創造性、他者との共生精神の3つが最も重要に

### 決意の言葉

**自己実現のために  
英語力を磨きたい**



徳島県立徳島北高校2年生  
生田陽菜さん

◎私は、ニューヨークランドの姉妹校に3か月間留学します。将来は医師として発展途上国の医療に貢献したいと考えているので、留学したら、英語力を高め、異文化への理解を深めることに力を入れるつもりです。また、食生活と健康との関係に興味があるので、

### 教師・保護者インタビュー

**自分の進路として  
海外を考えられる生徒を**



大阪府・私立初芝立命館中学・高校校長  
高橋克夫先生

◎本校からは、2年生1人がカナダに留学します。具体的な進路を決めるまではまだ時間があるので、生徒には、海外での出会いや感動などを通して、「将来こういうことがしたい」という方向性をつかんでほしいと思います。本制度は規模が大きく、事前・事後指導も充実しているため、参加者は

\*第1期生の総数は303人



グループワークでは、留学の目的などを語り合いながら、それぞれ自分が留学先で本当に取り組みたいことは何かを掘り下げて考えていった。

のは、自分の学びを他者に役立てたいという声だ。例えば、スキーマの技術を磨くために米国オレゴン州に留学する公立高校2年生は「先輩にアドバイスできるように、コーチング技術も見習いたい」と話していた。懇親会後は、留学の目的などを話し合うグループワークも行われた。ベトナムの大学で振動発電について学ぶという高校生、オーストラリアの牧場にファームステイする高校生、ガーナの孤児院で教育支援のボランティアをする高校生など、留学の目的は様々。第1期生は、壮行会を通して多様な志に触れ、留学に対する意欲を更に高めたに違いない。

なると、私は考えています。いずれの素養も、海外において価値観や文化的背景が異なる多様な人々と交流し、戸惑ったり悩んだりすることで、身に付けることが出来るはずで。海外留学は、皆さんの人生の幅を広げる好機です。精いっぱい頑張ってください。

### 果敢に挑戦することで 幅広い教養が得られる

三井住友銀行取締役会長  
(中央教育審議会会長)

北山楨介氏



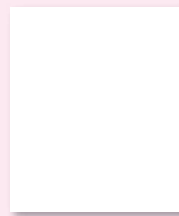
◎日本は明治以来、海外から導入した技術を改善、応用することで、発展してきました。しかし今後は、新たな価値を生み出す、イノベータータイプな力が今まで以上に求められていくでしょう。既成概念にとらわれない柔軟な発想は、幅広い教養があつてこそ可能です。「百聞は一見に如かず」と言いますから、実体験を通して知識を身に付けることを大切にしてください。海外の留学先では、日本では出来ないようなことを多く経験できます。失敗を恐れず、何事にも果敢に挑戦し、多彩な経験を積んでください。応援しています。

ニュージーランドの食料事情を学ぶことも、留学の目的の1つです。留学先の高校では、農業実習などの授業を積極的に履修する予定ですし、農家にホームステイをするので、農作業の様子を間近でじっくり観察できると期待しています。

### 自分の演奏で 人々に幸福を届けたい

東京都・私立桐朋女子高校音楽科  
(男女共学) 3年生

島方 瞭さん



◎私は、尊敬するバイオリニストの指導を受けるために、オーストリアの音楽アカデミーに留学します。そのバイオリニストとは、2014年12月に神奈川県で行われたコンサートで出会いました。聴衆として演奏に魅了され、「この人の下で学びたい!」と強く思いました。今、その夢が実現しようとしていることに、感動しています。本制度に応募するよう勧めてくれた祖母に感謝したいと思います。将来はヨーロッパで更に学び、自分の演奏で世界中の人々を幸福に出来るようなバイオリニストになりたいと考えています。

留学先での体験を進路選択に生かしやすいはず。将来の志望をしっかりと持ち、それを実現するために海外の大学に進学しようとする生徒が1人でも増えるよう、本校では今後も本制度について積極的に校内で告知し、参加を呼び掛けていきたいと考えています。

### 憧れの職業への 適性を判断してほしい

奈良県立奈良高校2年生の保護者  
落合浩一郎さん



◎子どもは考古学者に憧れ、インカ帝国など世界的に有名な史跡のあるペルーに留学したいと、自分で本制度に応募しました。留学は、海外と日本との違いやそれぞれの長所にたくさん気づき、視野を広げる良い機会だと思います。また、現地で発掘調査なども行うようなので、考古学者という職業が自分に向いているかどうかを判断するきっかけにもなるはずです。子どもが考古学者になることに、今の私は、正直、必ずしも賛成はしていませんが、もし、帰国した子どもが将来就きたい職業として本気で志す意思を示すことが出来れば、一人前として認め、応援していきたいと考えています。

### 鉱物から金属を分離する技術を追究し ものづくりを根底から支える

秋田大 国際資源学部 柴山敦<sup>あつし</sup>研究室

銅や鉄といった、ものづくりに欠かせない天然金属資源は、実は近年、品質が下がっている。それは、古くから優先して採掘されてきた高品質な鉱物が尽きようとしているためだ。不純物が多く含まれる鉱物から金属を分離させようとしても、従来の技術では有害物質によって環境が汚染される危険性があるなど、困難が多い。そこで、資源工学では、安全で安定的に金属を得るための新技術を開発している。その第一人者である秋田大国際資源学部の柴山敦教授に、研究の最前線と成果を聞いた。

#### フローチャートで分かる柴山敦研究室

##### 大学院生の 主な出身分野

工学

理学

など

◎鉱物から効率的に金属を精錬する技術を開発するためには、化学や物理の知識が必要となる。そのため、学部時代に工学や理学を学んだ学生が多い。留学生を積極的に受け入れ、現在は、中国、ボツワナ、パキスタン、モンゴルなどのアジア・アフリカ諸国から7人が在籍している。

##### 研究にかかわる 学問分野と研究内容

地球システム  
工学

資源工学

金属生産工学

リサイクル  
工学

◎地球上のあらゆる資源を対象とする学問であるため、地球環境や金属、リサイクルなどに関係する学問とかがわりが深い。

##### 研究成果と 社会のかかわり

良質な金属を  
安定的に  
社会に供給し  
ものづくりを支援

金属の効率的な  
再利用を促し  
環境保全に貢献

など

◎ヒ素を多く含む銅鉱物から純度を高めた銅を分離できるようにした。また、廃棄された電子機器の基板などから金属を分離させ、それを再利用することで過剰な採掘を抑え、環境保全に貢献することも期待される。

## 失敗の要因を分析し、改善を重ねる根気が不可欠

資源工学が求める学生像

自然に対する関心

異文化を理解する気持ち

粘り強く取り組む姿勢

資源工学では、天然鉱物から金や銀、銅などを効率よく分離させる仕組みについて研究します。そのため、なぜ鉱物が地球上に出来るのかという、自然に対する関心を持つことが何よりも大切です。また、ただ不思議に思うだけでなく、その理由を理解する必要がありますので、化学や物理の知識も求められます。

海外の企業や研究機関との共同研究などのために、世界各国を飛び回ることもしばしばです。私の場合、銅ならチリ、鉄ならブラジルやオーストラリアと、研究対象の金属の主要な産出国には特によく足を運びます。海外での共同研究では、自分と文化的背景が異なる多様な技術者と力を合わせる必要があるため、異文化を理解しようとする気持ちも欠かせません。

研究では、今までにない金属の分離技術の開発に取り組むため、結果は誰にも分かりませんし、うまくいかないことが大半です。それでも諦めずに失敗の要因を分析し、改善を重ねていく根気がなければ、研究を続けることは出来ません。忍耐強く取り組んで、より良い技術を追及できる方に学んでほしいと願っています。

### 高校生へのメッセージ

勉強や部活動、何でも構いませんから、好きなことにとことん打ち込んでほしいと思います。うまくいかなかったとしても、好きなことであればくじけずに再挑戦できますから、目標達成のために何をすべきかを考える訓練になるはず。失敗に学ぶという姿勢は、大学での学びにも社会に出てからも、きっと役立つと思います。



柴山 敦 教授

しばやま あつし 秋田大国際資源学部教授、副学部長。同大ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長。同大大学院博士課程教育リーダーインテグレーション「レアメタル等資源ニューフロンティア」養成プログラム「コアリーダー」。九州大大学院工学研究科博士課程修了。秋田大助教などを経て、現職。資源・素材学会奨励賞などを受賞。著書に「レアメタルの最新動向」（分担執筆・シーエムシー出版）など。

## 研究を志したきっかけ 高品質な金属を 自分の手で 作り出したい

私は、1980年代後半のいわゆるバブル経済の時期に高校生活を送りました。大量生産と大量消費が当たり前だった頃です。そこから、

それを担う機械系・電気系のエンジニアを夢見る友人が周りに大勢いました。私もものづくりに憧れていました。製品開発よりもエネルギー開発に漠然と関心がありました。そこで、石炭や石油といったエネルギー資源を採取し、応用する技術について研究する学問、資源工学を専門的に学びたいと考えるようになったのです。私は大学入学前、資源工学とは日の当たらない学問だと思っていました。映像や写真で見た鉱山や石炭山の坑道の薄暗い印象が強く残っていましたし、福岡県内で生まれ育った私は、斜陽化した筑豊炭田の話をよく耳にしていたからです。しかし、大学で学ぼうちに、イメージが少しずつ変わっていきました。例えば、採掘や精錬、加工と、金属が精製され商品として流通するまでの経

### 研究概要

## ベースメタルの 純度向上を目指し 新技術の開発を続ける

私は、社会でよく用いられる銅や鉛などの、ベースメタルと呼ばれる金属を安定して供給する、技術の開発に力を入れています。ベースメタルを生み出す高品質な鉱物は、古くから世界各地で大量に採掘されてきたため、今では入手しにくくなっています。残された低品質の鉱物には不純物が多く混入し、従来の技術では、処理工程を増やさなければ、商

路を知ること、資源工学は機械産業の根幹を支える重要な学問だと感じるようになりました。また、金属素材メーカーを訪問する授業で、鉱物が金属に精錬される現場を見学した時は、まるで魔法を見たような感動がありました。ただの石と変わらないように見える鉱物が、社会的に価値が高い金や銀、銅などに変わっていく過程を目の当たりにしたからです。「自分の手で技術を更に向向上させ、高品質な金属によるものづくりに貢献したい」という気持ちに胸が高鳴ったことをよく覚えています。



写真 秋田県中東部、大仙市にかつてあった荒川鉱山から採掘された銅鉱物。柴山研究室では、各地の鉱物の収集・保存も行っている

品に使える純度の金属が得られませんが、処理の過程で出る有害物質への対策も、厳重に行う必要があります。その分、コストが掛かり、金属の価格が高騰してしまうのです。

鉱物から金属を分離させる主な技術には、いくつかの薬剤を使い、特定の粒子を気泡に付着させて分離させる手法や、目当ての金属を鉱物から選択的に溶かす方法の2つがあり、鉱物の種類や組成などに応じて、単独で、もしくは組み合わせで用いられます。私は、2つの方法の組み合わせを変えたり、それぞれの方法を改良したりして、低品質の鉱物から効率よく、確実にベースメタルを分離させようとしています。

研究では基本的に産出国から取り寄せた鉱物を用いますが、産出国に足を運び、採掘されたばかりの鉱物に触れることも重視しています。鉱物は、採掘されて時間が経つほど表面の酸化が進みます。分離技術の開発には、鉱物がどの程度酸化しているのかを考慮しなければなりませんから、採掘直後の鉱物の状態をしっかり把握する必要があります。

実験は、薬剤の種類や溶液条件などを換え、高純度のベースメタルが出来るまで繰り返し行います。正直、失敗の連続ですが、新しい技術が簡単に生み出せるはずがありません。それだけに、うまくいった時の喜びはひとしおです。「不可能を可能に出来た」という達成感が得られます。

### 研究の成果と展望

## リサイクル技術へ応用し 世界的な 環境保全に期待

私が資源工学の研究に取り組む始めて25年程の間に、以前は不可能だった鉱物からレアメタルの分離が成功するようになるなど、金属の分離技術は大きく進歩しました。私も、不純物であるヒ素

を奇麗に取り除き、高純度の銅を得る技術などを開発しています。ヒ素が含まれているために従来は手が付けられていなかった銅鉱山から、良質の銅を採掘することにつながると期待しています。

金属の分離技術は、リサイクルにも応用できます。廃棄された電子機器の基板などに用いられている、金や銀、銅といった様々な金属は、鉱物から金属を得る技術と原理的に同じ技術によって、基板を構成する樹脂などの不純物から目的成分を分離できるのです。社会的な課題でもある廃棄物の大量回収が実現すれば、廃棄物から安定して金属を再利用できるようになります。そうすれば、新たに採掘する鉱物の量を減らせるので、世界的な環境保全につながるでしょう。資源が少なく、輸入に頼らざるを得ない日本では、経済へのインパクトも大きいはずですが、限りある資源を有効に活用するために、資源工学の知見は大きな武器となります。ものづくりにも環境問題の解決にも貢献できるということに、この学問を研究する大きな醍醐味があると感じています。

### 用語解説

**1 筑豊炭田**  
福岡県北部に位置する炭田。明治以後本格的に開発され、日本最大の炭田として産業の発展を担ったが、1950年代に衰退が始まり、80年代前半までにはほぼ全ての炭坑が稼働を停止した。

**2 精錬**  
金属の純度を上げること。

**3 レアメタル**  
産出量が少ない金属。プラチナ、タングステンなど。

**4 ヒ素**  
元素の1つ。化合物は毒性が強い。元素記号As。

**5 粗銅**  
粗く精錬した銅。純度は98〜99.0%程度で、このままでは商品化できない。

**6 純銅**  
限りなく100%に近い純度の銅。ここでは、99.999%程度の銅を指す。

**7 イオン**  
電気を帯びた原子または分子。

# 銅のリサイクルの効率化を目指して

鈴木 誉也さん

すずき・よしや 秋田大大学院工学資源学研究所博士課程前期1年。秋田県立秋田中央高校卒業。



**Q** なぜこの研究分野に進んだのですか

**A** 高校時代に化学や物理が好きで、環境問題にも興味があつた私は、将来は省エネ製品を開発したいと考えるようになりまし

た。エンジニアを目指し、大学は工学部を選びましたが、入学直前に発生した福島第一原子力発電所の事故から、環境に優しいエネルギー開発に興味を湧き、資源の再利用にも強い関心を持つようになりました。

大学で学ぶうちに、廃棄物から効

率よく金属を分離させる技術が研究されていることを知り、その研究に自分も携わりたいと、柴山教授の研究室の門をたたいたのです。

**Q** 柴山教授の研究室での研究内容を教えてください

**A** 廃棄された電子機器の基板などのリサイクル原料から、低コストで銅を分離させる技術の開発に取り組んでいます。事前に

リサイクル原料に熱処理を施して純度98%ほどの粗銅を作り、これを電気分解によって純銅にしようとしているのです。具体的には、硫酸銅水溶液を満たした水槽に電極を入れて電気を流します。すると、プラス極に付けた粗銅から銅イオンが離れてマイナス極に集まり、純銅が出来ます。しかし、電気分解を進める過程で、粗銅の表面に不純物が付着して銅イオンの動きを阻害し、十分な量の純銅が作られる前に、銅イオンの移動を完全に止めてしまうのです。

熱処理後に急激ではなく徐々に冷却させた粗銅を用いれば、電気分解時に不純物が間隔を空けて付着し、銅イオンが移動できることが、私の研究で分かっています。ただ、

電気分解が終わる前に不純物が密着し、銅イオンが動かなくなってしまうから、電極に振動を与えて付着物をふるい落とすなど、別の方法も加えることを模索しています。

電気分解による分離技術が実用化されれば、従来の技術に比べて7分の1以下の電力で、同じ量の純銅が作れるようになります。更に、付着したり沈殿したりした不純物からは、銀などの金属も簡単に得られるので、一石二鳥です。1日も早く完成させ、ベースメタルの安定供給に寄与したいと考えています。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 大学では、まだ答えがない問題に取り組みます。私の研

究も、何をすればうまくいくのか、誰にも分かりません。そのため、私は研究を少しでも前進させたいと、実験に失敗しても、その理由を徹底的に分析するようにしています。

「なぜ」を考えることによって、意外な発見があります。例えば、私は数学の公式が成り立つ理由が分かるようになり、公式をただ暗記していた時よりもずっと数学が好きになりました。皆さんも、周囲に少し目を向ければ、木製バットより金属バットの方が打ったボールがよく飛ぶのはなぜかなど、不思議があふれていることに気付くはずですよ。その謎を解くヒントを得たいという意欲を持って取り組めば、目の前の学習が何倍も楽しくなるでしょう。

## 私の高校時代

### 生徒会活動で身に付けたコミュニケーション能力

● 高校1年生から3年間、生徒会活動に取り組みました。最も印象的だったのは、毎年6月の学校祭での活動です。生徒会では、各クラスが立てた企画を見て、クラスごとに予算を割り当てました。予算を超えそうなクラスには、予算内で実現する方法を、生徒会長がそのクラスに行って提案しました。私も、生徒会長だった3年生の学校祭では、同じ学年のクラスに足を運んだことがあります。模擬店を出すための機材を、学内の機材で代用してほしいと伝えたところ、当初は反対する者もいました。しかし、根気よく説得を続けた結果、学校祭準備期間内に全員が賛成してくれました。他者の気持ちを気遣いながら、自分の意見を伝えられたからこそだと思います。

生徒会活動でコミュニケーション能力を伸ばせたことは、多くの人と連携して進める必要がある大学での研究に、とても役立っています。

京都大、大阪大、関西学院大による「高大接続フォーラム」開催！

## 高校教育改革、大学教育改革、入試改革、高大接続の現状と今後の動向とは

2015年1月、文部科学省の「高大接続改革実行プラン」が公表され、高校教育・大学教育・大学入学者選抜の一体改革の方向性が示された。それを受けて、同年6月、大阪において、スーパーグローバル大学の指定校でもある3大学、京都大、大阪大、関西学院大による「高大接続フォーラム」が開催され、高大接続改革の現状と展望、各大学の高大接続・入試改革の取り組みが語られた。

### 第1部 文部科学省による基調講演

#### 高大接続改革の背景と展望

フォーラムの第1部では、文部科学省の伯井美徳大臣官房審議官による基調講演、第2部では、京都大・大阪大・関西学院大それぞれの取り組み、ベネッセコーポレーションによる大学入試における英語の外部検

定試験の活用に関する報告が行われた。当日はあいにくの雨だったが、会場は高校教師を中心とする約500人の参加者で埋め尽くされた。



基調講演のテーマは、高大接続改革の背景、高大接続改革実行プランの内容と検討状況、高校教育改革だ。

グローバル化や生産年齢人口の減少が進む中、イノベーション人材の育成が急務であり、そのためには、知識量の拡大に主眼を置いたこれまでの教育から、思考力・判断力・表現力や主体性を持って多様な人々と協働する態度などの「真の学ぶ力」の育成を重視する教育に転換しなければならぬ。「知識伝達型の高校教

育を刷新し、大学入試も多様な能力・経験を評価する選抜へ転換を図り、

大学教育との三位一体の改革を目指すのが実行プランの趣旨」と、伯井審議官は語った。

中でも、高校現場への影響が大きい事案は、センター試験に代わる新テストの導入、及び英語の4技能を総合的に育成・評価する英語教育の改革だ。後者については、民間の資格検定を入試の合否判定材料として活用する道が示された。高校教育改革



文部科学省  
大臣官房審議官  
高大接続・初等中等教育局担当  
**伯井美徳**  
はくい・よしのり

については、学習指導要領を抜本的に見直し、アクティブ・ラーニングの充実を図る他、選挙権年齢等が満18歳以上となることを踏まえた社会参画意識を高める科目の設置、地理歴史科の見直し、課題解決型学習の充実などが挙げられた。また、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」が2020年度をめどに実施予定である点や、22年度に学習指導要領が改訂されることが改めて確認された。

## 大学入試は「マッチングの場」

京都大は、北野正雄教育担当理事・副学長が高大連携の取り組み、16年度から始まる特色入試の概要を報告した。「本学は、入試を選抜ではなく、『マッチングのプロセス』と位置付けている。大学が高校生の適性や興味・関心を捉えると同時に、高校生が自身の能力や才能を発揮する機会を与えることが大切」と北野副学長は説く。

マッチングの機会として、京都大は高大連携を重視。既に13都府県市の教育委員会と連携している。15年8月には模擬授業や大学生との交流を中心としたサマースクールを行い、同11月には各都府県市の代表12校の高校生が研究発表を行うサイエンスフェスティバルを実施予定だ。高校生の学びを支援しつつ、京都大の教育や校風を周知してマッチングを図る。



京都大  
教育担当理事・  
副学長  
**北野正雄**  
きたの・まさお

それを更に推し進めた改革が、16年度に始まる「特色入試」だ。各学部のアドミッション・ポリシー（AP）に応じて、推薦・AO入試、後期日程など、様々な方式で選抜する。入学定員は全学部計100人程度。総入学定員の3%だが、北野副学長は「これはあくまで出発点」と今後の拡

### 図1 京都大 特色入試の概要

高大接続と個々の学部の教育を受ける基礎学力を重視し、次の①と②の判定を併せて、総合的に評価して選抜する。

#### ①高校での学修における行動と成果の判定

高校在学中の顕著な活動歴（\*1）を記す学業活動報告書や推薦書、学びの設計書で評価する

#### ②個々の学部におけるカリキュラムや教育コースへの適合力の判定

センター試験の成績、学部ごとの能力測定考査、論文試験、面接試験、口頭試問などを組み合わせて実施する

\*1 数学オリンピックや国際科学オリンピック出場、各種大会における入賞、教育委員会賞、国際バカロレアディプロマコース、SAT、英語外部検定試験の成績など

\* 京都大の資料を基に編集部で作成

大を示唆する。最大の特徴は高大接続を意識した点で、出願時には高校時代の活動を記す「学業活動報告書（学びの報告書）」と、志望理由や大学での目標を記載する「学びの設計書」を提出。それらとセンター試験、

### 第2部 大阪大 改革の現状報告

## キーワードは「世界適塾」

大阪大は、東島清<sup>ひがしじま</sup>教育担当理事・副学長が「育てたい人、受け入れた人」をテーマに高大接続の現状と展望を語った。同大学はAPに「確かな基礎学力」「主体的に学ぶ態度」「自ら課題を発見し、探究する意欲」を掲げる。「大学教育は『教わる』から『自ら学ぶ』への転換が必要で、能動的な学習態度を持つ人にとって、大学は宝の山になる」と東島副学長は断言する。大阪大の改革を象徴するキーワードは「世界適塾」だ。同大



大阪大  
教育担当理事・  
副学長  
**東島清**  
ひがしじま・きよし

総合問題、口頭試問、論文試験など、個別試験の成績を総合して可否を判定する（図1）。京都大では、全学のAPに「対話を根幹とした自学自習」を掲げる。特色入試もそうした主体性を重視する選抜内容にしている。

学は江戸時代後期、緒方洪庵が開いた適塾を原点とする。幕末には日本中から俊英が集ったが、21世紀の大阪大は世界中から優れた学生や研究者が集い「調和ある多様性」を創造するグローバル大学を目指すという。

その達成に向け、様々な分野で教育の国際化を加速させる。英語で行う授業の増加、国外からの遠隔講義の充実、海外派遣への支援などを行うのと同時に、17年度にはクォーター制を導入。春・秋・冬学期に通常の授業を行い、6月下旬〜8月を夏期講習期間として海外留学を促進する。現在実施する独自入試に代えて、17年度、定員の約10%を対象に、高校生の多様な能力や実績、意欲を評

## 図2 大阪大 独自入試制度 概要

- **挑戦枠（一般入試前期課程）／理学部：37人** 知識の習得だけでなく、自分の頭脳で粘り強く考察する人を選抜
- **研究奨励AO入試／理学部：16人** 高校で優れた研究活動をした人を選抜
- **推薦入試／基礎工学部：40人** 科学技術を担う意欲と適性を評価
- **国際科学オリンピックAO入試／理・工・基礎工学部** 国際科学オリンピック日本代表者から選抜
- **世界適塾AO入試、世界適塾推薦入試、国際オリンピックAO入試（2017年度～）** 定員の10%をめどに、高校で主体的に学ぶ態度と能力を身に付けた意欲ある人材を選抜

\*大阪大の資料を基に編集部で作成

価する「世界適塾入試」を導入予定。高校時代の成績やセンター試験の他、GTEC CBTなどの英語外部検定試験のスコア、SSHの研究発表会出場者、SGHコースの履修者など、高校時代の多様な活動を総合的に評価する（図2）。

高校生の多様な力を育むため、高大接続も強化する。科学技術振興機構のグローバルサイエンスキャンパスの指定を受け、高校生対象の理数教育も実施していく。



関西学院大  
高大接続センター  
次長

**尾木義久**

おぎ・よしひさ



関西学院大  
理事・副学長

**小菅正伸**

こすが・まさのぶ

小菅正伸理事・副学長から、大学の歴史、国際化の取り組みが説明された後、高大接続センターの尾木義久次長が高大連携・入試改革の現状を報告した。高大連携という点、従

## 第2部 関西学院大 改革の現状報告

### 高大接続で課題研究をサポート

関西学院大は、19世紀末の宣教師W・R・ランバスによる創立時から「世界市民の育成」を大学のミッションとして掲げてきたグローバル大学である。ミッションの実現のために、国際ユースボランティア、ダブルディグリー留学、海外フィールドワークなど、数多くの国際教育プログラムを展開してきた。

来、大学・学部理解のための出前授業など、キャリア教育としての側面が強かった。同大学では、SGHや課題研究に取り組む高校生、それを支援する高校教師のために、専門的な知識・技能の提供を主眼に置く。高校生による公開討論会、国連機関の職員を招いてのワークショップなどの意欲や志を醸成する取り組みから、英語の4技能をバランスよく伸ばすための高校教師向けセミナーまで、多様な形で高校の課題研究活動や語学教育を支援している。

入試改革も、文部科学省の高大接続改革に先行して力を入れてきた。14年度には、学生の能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価する「グローバル入試」を導入。16年度からは、SGH・SSH校生を対象とする公募推薦入試、4技能型の英語検定試験のスコアを出願資格とする入試制度を導入予定だ（図3）。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」は活用の方で準備を進め

## 図3 関西学院大 高大接続改革実行プランに対応した入試 概要

- **グローバル入試（2014年度～）** GTEC for STUDENTS、GTEC CBTなどのスコアや、模擬国連活動に取り組んだ経験、留学経験や海外経験を有する者（帰国生徒含む）、国際バカロレア認定者、科学オリンピックに挑戦した者などを対象とし、5つのカテゴリーで実施
- **4技能型の英語検定試験と大学入試センター試験を活用する入試（2016年度～）** GTEC CBT、TOEFLなどのスコアを出願資格に設定。レベルはCEFR・B2レベル程度
- **4技能型の英語検定試験のスコアと推薦入学の出願資格（2016年度から漸次実施）** GTEC CBT、TOEFLなどのスコアを有する者が望ましい。レベルはCEFR・B1レベル程度
- **SGH校対象公募推薦入試、SSH校対象公募推薦入試、教育連携校対象公募推薦入試（2016年度～）** 課題研究論文や学びの計画書による第1次審査、個別面接・グループディスカッション・プレゼンテーションなどによる2次審査で評価。GTEC CBT、TOEFLなどのスコアについても評価の対象

\*関西学院大の資料を基に編集部で作成

ており、19年度実施予定の「高等学  
校基礎学力テスト（仮称）」について  
も推薦入試などでの活用を検討中だ。  
「政府が進めているからということでは  
なく、これからの社会に必要な力を  
いかに子どもたちに身に付けさせ  
るかという視点が、教育者に求めら  
れている」と、尾木次長は強調した。

## 入試での英語外部検定試験の活用法を解説

ベネッセコーポレーションの山田高幹からは、今後の大学入試において、留学経験や高校での多様な活動歴による多面的・総合的な評価、及び英語の4技能の評価が一層重視される見通しが解説された。

4技能型の英語外部検定試験の入試での活用法には、次の5点が示された。

- ① 出願基準（基準スコアを満たす者のみ出願可）
- ② 書類審査（可否判定に利用）
- ③ 試験の代替（英語本試験に代えてスコアを得点化）
- ④ みなし得点化（スコアに応じてみなし得点を設定し、英語本試験の得点より高い場合に代替）
- ⑤ ベースアップ（スコアに応じて英語本試験に得点加算）

15年度入試では、センター試験の英語で思うように得点できなかった受験生が、GTECのスコアが志望大の基準に達していたために合格した事例が報告された。外部検定試験

のスコアを持つていることが進路実現に有効だった一例といえる。

英語の外部検定試験を活用する入試の受験対象者数は、15年度入試まで3000人程度だったが、16年度以降は7万人に上り、更に拡大する見込みだ。外部検定試験が重視される背景には、高校生の英語力の課題がある。日本の高校生の90%以上が、CEFR（ヨーロッパ全体で外国語の学習者の習得レベルを示す基準）のA2レベルにとどまると見られており、B1以上は10%に満たない。

高大接続改革の議論では、日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発のあり方が論点に上がっており、高校生の学力レベルに適した外部検定試験の選択が今後、一層重要になると考えられる。



ベネッセコーポレーション  
**山田高幹**  
やまだ・たかもと

## 新テストや、主体性等を入試でどう測るかに関心が

質疑応答では、会場から多くの質問が寄せられた。

中でも関心が高かったのは、新テストの活用だ。「『高等学校基礎学力テスト（仮称）』を入試に使う場合、どのように活用するのか」という質問に対して、京都大の北野副学長は、「テストの活用は改革会議の議論の内容を見ながら総合的に判断していく。高校現場に、入試で必要のない科目は履修しない傾向があるのは事実。幅広い学力が担保されるなら、何らかの形で入試に活用することはあり得る」と答えた。大阪大の東島副学長は、「本テストは高校における学習の達成度を測る試験なので、入試とは目的が異なる」という認識を示しながらも、「大学としては調査書に書いてほしいという思いはある」と答えた。関西学院大の小菅副学長は、「調査書を補完する情報として活用する方向で検討中」と述べた。

各大学の報告の中で強調されていた高校生の主体性や意欲について、

入試ではどのように評価されるのかにも、関心が集まった。「高校生の主体性を大学入試でどのように測っていくのか」という質問に対して、東島副学長は、「高校生を身近で見ている学校の先生の目が、最も信頼できると考えられる。高校からの提出書類を採用すると共に、高校生本人が作成する活動報告の内容から、我々自身が受験生の資質を見極めていく必要がある」と述べ、高校生の活動報告を読み説く力を持つ教職員を育成する意向を語った。

今回のフォーラムで明らかになったのは、高大接続改革に対する高校現場の関心の高さだ。会場は高校関係者で埋まり、質疑応答では前述の他にも、新テストや入試方式について多くの質問が寄せられた。

高大接続改革の細部はいまだに見えない部分も多いが、引き続き文部科学省や各大学から発信される情報を注視していきたい。

「なぜ、学ぶのか」という問いに答えられる生徒の育成を

6月号特集の座談会において、京都市立西京高校の岩佐峰之先生が言われているように、「なぜ、学ぶのか」という質問に「社会に貢献するために学んでいる」と答えられる生徒を育成することが重要だと考えた。そうすることが、学びの動機を持ち続け、学習を継続できる生徒の育成につながると感じている。

〔宮崎県立小林高校・宮野原章史〕

学びを支える精神力を培う様々な経験

6月号の「ハートをこがせ！」を読み、かきた同好会の活動に没頭できる力は、学びを支える精神力を培う一助でもあると思った。ワクワクする体験をして、想像力が膨らみ、文化の価値を実感する良い機会となるだろう。そうした伝統競技を経験し、習熟を目指す方は、いま一度見直されてもよいと思う。

〔兵庫県・私立神戸国際中学・高校・徳岡努〕

教師は、「生徒が出来ること」をまず考えるべき

6月号の「指導変革の軌跡」で紹介された石川県立金沢北陵高校の記事で、「生徒の力はこの程度だろう」と、教師が生徒の限界を決めつけるべきではないと改めて実感しました」という言葉が印象に残った。現場では、時折、生徒が「出来ない」と言っつのを耳にする。課題はもちろんあるが、「出来ない」のではなく、教師が「出来るようにさせていないのではないか」と思うし、教師は「出来ることは何か」を先に考えるべきだと思う。改めて、

# Reader's VIEW

Volume 3

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

指導側の原点を考えさせられた。

〔埼玉県立大宮光陵高校・久保島昌一〕

生徒がオープンキャンパスでの体験を語り合う場につなげたい

6月号の「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」で紹介された、「2年生・夏休み前後 オープンキャンパス指導ツール」を使ったら、オープンキャンパス参加報告発表会やオープンキャンパスの体験を語り合う場につなげていく点を参考にしたい。教師の指導により、オープンキャンパスを単発的な行事に終わらせないよう実践されていることこそが、今回のこのコーナーから学ぶべき点だろう。

〔滋賀県立草津東高校・堀浩司〕

段階を踏んだ「高大接続改革実行プラン」に

6月号の「半歩未来を考える教育オピニオン」の記事における、東京都立西高校の宮本久也校長と岡山県立和気閑合高校の香山真一校長の対談は、高校の実態をよく踏まえた内容であり、「高大接続改革実行プラン」に高校現場がまだ追いつけていない現状が浮き彫りになっていった。2人も指摘しているように、段階を踏んだ改革にしてほしいと痛感している。

〔埼玉県・匿名希望〕

教師川柳

我が想い 生徒の笑顔 それひとつ

香川県私立香川県大手前高校中学・高校・佐藤浩章

編集後記

◎今号の取材を通して、どの先生方も「生徒の未来のため」にご指導されていることが分かりました。新しい入試に向けた指導を終着点とするのではなく、その先の、高校卒業後も「自ら生き抜いていける力」の育成の重要性を感じました。特集の学校事例からも、入試改革は意識しつつも、生徒にどのような人材になってほしいのかといった、生徒の未来を見据えたお取り組みを実践されていることが感じ取れました。新しい入試に向けて指導の内容が一部変わったとしても、「生徒の未来のため」の指導は、不変的なものなのだと思います。(廣田)

『VIEW21』高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。誌面のPDFや「改良！ 指導ツール ビフォーアフター」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



VIEW21 8月号 Vol.3

2015年8月21日発行

発行人 山崎昌樹  
 編集人 春名啓紀  
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
 印刷製本 凸版印刷(株)  
 編集協力 (有)ペンタコ  
 執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦  
 撮影協力 荒川 潤、川上一生、谷口 哲、藤木潤一、ヤマグチイッキ  
 イラスト協力 伊藤美樹

VIEW21編集部  
 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2015

VIEW21

2015  
October  
10月  
Volume 4

次号は  
10月16日発行(予定)

『VIEW21』高校版は  
年6回の発行です

## COVER STORY

教師と生徒の肖像

# ウェルカムピンチ！

表紙の学校 福井県立福井商業高校 五十嵐<sup>ゆうこ</sup>裕子先生



福井県立福井商業高校チアリーダー部「<sup>ジェット</sup>JETS」は、昨年度、全日本チアダンス選手権大会チアダンス部門で3連覇、全米チアダンス選手権大会チームパフォーマンス部門でも3連覇を成し遂げた強豪チームだ。他部の試合の応援や、地域のイベントなどにも出演し、選手や観客に元気を与える華やかなチアダンス。しかし、現場では、出演時間が増えたり、会場が狭かったりと想定外のことがよく起きる。戸惑う部員たちに、顧問の五十嵐裕子先生は、「ピンチこそチャンス！」と鼓舞する。「思いがけないことに直面しても、動じず、冷静に対応していく。ピンチを楽しめるようになってこそ、様々な困難に立ち向かえる人間になれると思うのです」。

平日3時間、土日5～6時間行うという練習の内容は、部員たちが自ら考える。目指すは「自立・自律したチーム」だ。「部員一人ひとりが指導者であり、チームや自分に必要なことは何かを考え、行動するから強くなる」と先生は言う。そうした姿勢は生徒の日常も変えていく。大学進学を目指す生徒は、課題や予習・復習にしっかり取り組むことで時間管理がうまくなった。高校卒業後、アメリカへのダンス留学を目指す生徒は、自らALTに頼み、英会話の練習を始めた。「自分に自信がなく、何となく高校生活を送ろうとしていた生徒が、チアダンスを通して、中身の濃い3年間を送り、ジェット噴射のごとく一気に成長し、世界に羽ばたいていく。自分で自分を磨き高められるような人になっていきます。全米大会優勝を目標に掲げる意味は、そこにあるのです」。

58人の部員を束ねる部長はこう言った。「1年生の時には、先生が掲げる“全米大会優勝”なんて信じられなかった。でも今は、絶対に優勝したいですし、そのために全力を尽くします」。

ビュー21 高校版 Volume3 2015年8月号

2015年8月21日発行/通巻第353号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所  
©Benesse Corporation 2015

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】

受付時間 月～金 8:00～19:00/土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)  
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17